

烈  
祖  
成  
績  
九

## 烈祖成績卷之九

慶長五年（一六〇〇）八月  
至其年九月

慶長五年八月、石田三成、使を大垣城主伊藤彦兵衛に遣はし城を借る。彦兵衛聴かず。福原直孝・平塚為廣大垣に至り彦兵衛を説きて曰はく、「三成、私を為すに非ずして専ら公家の為に城を借る。宜しく亟すみやかに避去すべし。要害の地を択び寨を築き以て自ら守れ」と。彦兵衛、之に従ひ寨を采邑今村に築き焉に徙居す。

九日、三成、八千余兵を將ゐ佐和山を發ち垂井に留まること一日。

十一日、大垣城に入る。家忠日記作十六日入大垣。今從關原記大全。關原軍記・關原合戦誌・石卯餘史・

八十合戦誌作六千。諸書或作一万余騎。今從大全 部分けし、其兵蒲生備中、伊勢口を出で河津駒

野に屯す。榎原彦右衛門・川瀬左馬助、岐阜城を援く。舞兵庫遊軍として三千余兵を以て自衛す。合戦誌・餘史・關原軍記拏其兵数、各有異同。未知孰是。故不書 島津惟新・其姪豊

久・小西行長・能谷直陳・垣見家純・秋月種長・高橋元種・相良長每・木村宗左衛門・其子傳藏・平塚為廣等之に従ふ。合せて二万三千六百余人。家忠日記・徳川記・

餘史・慶長一統記・松栄記事 美濃今尾城主市橋長勝、神祖の命を受け小山より還り城を守

る。石田三成の党(丸力)九毛三郎兵衛兵庫頭某子 福束城に拠り大垣の声援を為す。尾州

人横井伊織、使を遣はし其帰款を勧む。三郎兵衛聴かず。

是日、長勝、徳永法印壽昌・横井伊織と兵二千を率ゐ之を攻む。三郎兵衛烽を拳げ梶村渡口を出で之を拒ぐ。大垣城中、烽起つを見伊藤彦兵衛・武光式部等をして之を援けしむ。彦兵衛旧大垣城主、式部長松城主 三成の援軍舞兵庫・高野越中等兵合せて三千、川を隔てて陣す。互いに鳥銃を発し相争ふ。

其夜、長勝、潜かに兵を遣はし陳後(陣)の村里を焼く。敵兵惶おそれ擾みだる。三郎兵衛城に入らんと欲し擾兵大垣に還らんと欲す。両軍皆乱る。長勝・壽昌川を涉り三郎兵衛の陣を追撃し五十余級を獲る。三郎兵衛僅かに免れ城に入るも、終に守る能は

ず城を棄て走る。長勝入り之を守り以て大阪・大垣の路を塞ぐ。屢しばしば密書を齎もたらす者を捕へ之を清洲に送る。神祖、其功を褒む。家忠日記係二十四日。今従大令（全）・合戦誌・餘史

○合戦誌・餘史並云、三郎兵衛出奔大垣。大全云、不知其所之後、寓居加賀経歳病死 敵将高木八郎兵衛 合戦誌・餘史作十郎左衛門。今従大全。蓋更称也 美濃高須城に拠る。高須或作高巢・高洲国音相通 福島正

則、二百余兵を率ゐ清洲を発し今尾に至る。徳永法印壽昌来会す。正則、長勝・壽昌の福束の功を称し高須を凶らしむ。壽昌、僧を以て使と為し禍福を諭す。八郎兵衛、原隠岐守を憚り大田に屯す。降を乞ふを欲せず、陰かに銃を放つに鉛弾を用ゐず、仮に攻守の勢を為し然る後に城を授けんと約す。壽昌諾す。

十九日、正則の援兵と進み城を攻む。壽昌、謀の泄もるるを慮り其状を士卒に告げず。但だ我指麾に従へと云ふ。士卒争ひ進む。横井作左衛門先登す。壽昌の兵河村所右衛門、城兵川瀬平左衛門と槍を接し其首を獲る。徳永左衛門、城兵寺澤孫左衛門と槍を接し、孫左衛門重創して退く。士卒相継ぎ銃を放ち槍を揮ひ、壽昌遽にわ

かに之を止むるも聴かず。壽昌已むを得ず麾を揮ひ進む。兵徳永掃部・稻葉外記等頻りに進み堞壁を毀こぼたと欲す。八郎兵衛怒り、壽昌我あざむを給くと謂おもふ。開門し礮ほこを横にして出で、城兵殊に死闘す。我兵敗走し壽昌還り闘へと声を励ます。徳永掃部、高木権六と槍を接し、河村所右衛門、城將八郎兵衛と槍を接す。稻葉外記奮撃し敵を却く。我兵重沓八郎兵衛力屈し城に入る。市橋長勝、今尾より来正則に退兵を勧む。正則怒り壽昌に謂ひて曰はく、「(凡そ)九城を攻むる者善く形勢を察し然る後に兵を進む。奈何いかんぞ輕拳し士卒を多く損ふ」と。乃ち軍を斂おさめ退く。八郎兵衛後援無きを以て城を出で去る。壽昌兵を置き之を成る。神祖、其功を賞す。乱平し高須城を賜ふ。大全・合戦誌・餘史・関原記・関原軍記○大全 曰、関原戦後八郎兵衛至出雲依堀尾吉晴。

其後病死

是日、長束正家、兵一千三百を率ゐ水口城を発し將に安濃津城を攻めんとす。毛利秀元大軍の後継するを待み、進み東正山 諸書作當世山、今從関原軍記 に屯す。其夜富

田知治、城兵二千五百を分け二隊と為し正家の營を掩撃す。正家敗走し知治勝に  
乗じ追撃し鷹尾葛原に至る。東正山に遣る所の旗幟帷幕を奪ひて還る。 大全 犬山

城は岐阜の保障（とりで）にして枢要の地たり。織田秀信、石田三成と議り稻葉右京

亮貞通 一鐵子兵庫頭重通兄・其子彦六郎典通・加藤左衛門佐・竹中丹後守重門 半兵衛重

治子・田丸中務少輔具直 伊勢国司源具教之旋（族）右中將具忠子・關長門守一政等を遣はし

之を援く。 一政安藝守盛信子、初領龜山三万石後降神祖。領伯耆黒阪三万石 石川光吉牙城に在り。援

軍第三城に在り。福島正則・徳永壽昌、相議るに、城甚だ險固なり。之を攻むる

は必ず兵を損ずること多しと。乃ち謀を遣はし城に入れ反問（問者）を縦つ。城將疑

懼し其心一ならず。重門・一政・左衛門佐密かに歸を謀り納款を井伊直政・本多

忠勝に須む。もと二人、之を許す。神祖、村越直吉を以て使と為し書を征西の諸將に

賜ふ。

二十日、直吉清洲に至る。直政・忠勝、先に使命を問ふ。直吉曰はく「諸將清洲

に在り未だ嘗て敵と一戦せず。故に其故を詰問す」と。直政・忠勝曰はく「諸將素もと三成と怨隙有り。駕の至るを待ちて速やかに之を撃たんと欲するも、今甚だ遅緩たり。諸將皆訝る。而して実を以て告げなば則ち必ず大いに失望せん。但だ当に之を慰勞すべし。慎み実を以て告ぐる勿かれ」と。直吉諾す。諸將に会するに及び、直吉幡然として以為へらく、吾智勇人に過ぐる者に非ざるに此の使を命ぜらる。蓋し能く直言を為す其事なり。今軍監の言に従ひて其言を易かふるは吾本志に非ずと。輒たまち諸將に見え將まさに命ぜんとして曰はく「(家康の命) 諸將軍旅に在り誠に勞えい勩(つかれる)たり。今吾旗を進め懈弛かいしする所無し。但だ風疾を患ふ故に爾しかる濡滞じゅたいなり」と。直政・忠勝、之を聞き蹙しやく類るい(心配なようす)し、諸將皆之に黙し傾かたむく。加藤嘉明進みて曰はく「吾輩は愚將なり。之に思ひ及ばず。宜しく閣下馬を進めざるべし」と。福島正則問ひて曰はく「子の意何如」と。嘉明曰はく「石田三成、外に嗣君を擁戴すると仮言して、内実は其姦謀を逞しうす。吾曹皆太閤の恩を蒙る。

今力を出し敵の城塞を抜き以て其効を見せずは則ち内府の疑終ついにに積とけず」と。合戦誌・餘史・慶元記並曰、直吉將命曰、「諸將在軍旅、誠為勞動。然未聞攻。一戰破一壘以著不与三成之實赤心無貳則當攻岐阜・犬山二城之一以著功效。然則速進義旗、兵若不利即日馳救之」。大全弁之曰、諸書皆同此說。然時人以嘉明之語為名言之一相伝。神祖至岡山執嘉明之手謝之以此一言也。若諸書之說、則不可謂之名言。今按ずるに、神祖引きて発せず。人をして思はせて自ら之を得しむ。温潤含蓄人の肌髓に入り深し。諸書の説の如くば則ち機鋒全て露はれ索然（空虚なるさま）として意味無し。大全の説是なり。故に之れ人を従ふ。按ずるに、徳川記・合戦誌・餘史並び曰はく、正則發言し嘉明之に和すと。今家忠日記・大全・松榮紀事に従ふ 正則拊掌ふしよう（我が意を得たりというさま）して曰はく、「典厩の言誠に然り。宜しく亟やかに進取の計を決すべし」と。諸將皆曰はく、「唯だ命是れ従ふのみ」と。直政・忠勝始めて安んじやす、乃ち敵城を攻むるを謀る。正則曰はく、「西兵多く岐阜に在り。今我犬山を攻むるを声言（いいふらす）せば則ち敵心之を救ふ。而して我直ちに岐阜に進攻せば則ち之を取るは難からず。岐阜既に陥ちなば則ち犬山攻めずして自から破るべし」と。諸將皆具議（其）に従ふ。細

川家伝録曰、初神祖在小山營、命忠興等諸將至清洲渡海擊破氏家内膳正所拋桑名城、歷伊賀路進至大阪。至是諸將欲攻桑名城。忠興曰、如桑名城拋守要害不可輒拔。且大垣之兵擊吾軍後則敗心矣。宜先擊。岐阜下之直政以為可諸將亦從之。而諸書無此事皆云、正則達議攻岐阜。唯松榮紀事以攻岐阜為忠興之策。今從家忠日記・大全・餘史・慶元記・

合戰誌

二十一日、諸將又會議す。「岐阜城は木曾川を帶し要害を為す。河三渡有り。上合渡と曰ひ下尾越と曰ふ。諸書合渡或作河田。河戸郷渡江渡国音相通。神祖賜堀親良書。及創業記作幸田。

大全曰、二川合流、故曰合渡。今從之。尾越或作小越。又作起或作騰（とう）亦相通 中笠町渡と曰ひ此れ

往来由る所なり。敵必ず之を扼す。宜しく上下渡口より兵を進むべし。餘史 尾越・

萩原皆舟に乗り竹鼻を出づべし」と。正則、直政・忠勝に謂ひて曰はく「我前鋒

を為さん。明日須らく上流合渡を渉るべし」と。直政・忠勝曰はく「足下、固よ

り前鋒を為す。誰か敢へて之を争はん。然れども輝政、(他) 佗州に在り。舟路不便な

り。足下州將なり。水路に熟す。宜しく船筏を并じ以て下流を渡るべし」と。正

則其言に服す。直政・忠勝、諸將を分け二軍と為し正則を以て正軍大将と為す。

其子正之・細川忠興・其子忠隆・興秋・弟興元・加藤嘉明・黒田長政・京極高知・

藤堂高虎・田中吉政・其子長頭等一万六千七百三十余人之に従ひ前駆として尾越

を渡る。池田輝政を以て北方大将と為し其子利隆・弟長吉・堀尾忠氏・有馬豊氏・

山内一豊・一柳直盛・浅野幸長・中村一榮等一万八千二百五十余人之に従ひ後拒

として合渡を渡る。大全・合戦誌・関原軍記○細川忠興事記曰、池田輝政・一柳直盛涉光明寺渡。豈光明寺

即在合渡乎輝政喜ばずして曰はく、「追手に向はずして搦手に向ふは甚だ望む所に非

ざるなり」と。直政・忠勝曰はく、「足下、閣下（家康）と翁婿なり。宜しく以て国謀

を為し、利先と為すべし。豈に軽重を較べ先後を争ひて此壮年勇鋭の言を発する

べけんや」と。輝政之に従ふ。正則又直政・忠勝に謂ひて曰はく、「下流敵兵近き

に在り。輝政兵を進むるを見れば則ち敵必ず接戦せん。搦手の戦追手より先んぜば

則ち吾輩の恥なり。宜しく固く之を制すべし」と。直政・忠勝、輝政を諭して其

約を固む。乃ち方略を定めて曰はく「岐阜城地勢險固なり。大軍山麓より斉攻せば則ち進退必ず難し。正則・忠興・高知・嘉明の四将宜しく追手七曲口上より攻むべし。輝政宜しく搦手百曲口を攻め、幸長・直盛瑞龍寺山寨を攻め、長政・吉政・高虎、大阪の援軍に備へ、一豊・豊氏・一榮、犬山城に備へ、其余の諸将、其形勢に随ひ以て機を決すべし」と。大全曰、此時嘉明謂衆曰、城兵必出拒之。直政曰、必不能出、

二人念（忿）争。果如嘉明之言。世人以為嘉明名言之二 岐阜中納言秀信、将佐を集め拒守の計を問ふ。木造壹忠曰はく「東軍衆多し。出で戦はば則ち必ず利あらず。堅守するに如かず」と。秀信曰はく「敵大軍と雖へども未だ一戦に及ばずして徒らに城に守らば則ち敵を畏るるに似る。前に大河有り。流に臨み決戦せば則ち之を破るは必なり」と。百百越前守曰はく「古より山河の固きを恃み敗を取る者多し。東兵善く騎す。乗ずる所と為るを恐る。宜しく河を去ること三町に横に虎落こらく（割竹の垣ゐもがり）を設け銃手一千を列ね六百銃を河岸に出し敵の鋭気を挫くべし。四百銃虎落中

に在り。其披靡（おそれひれ伏す）するに乘じ左右に奮撃せば則ち必ず勝を得ん」と。

大本書曰、諸書不見施越前之策、豈東軍渡河甚速。不暇施其方略歟。未詳。今拠餘史、越前之策非不施行。但東軍不顧死傷而進耳。見下文

是日（二十一日）、壹忠、兵二千五百を率ゐ岐阜を發し米野に陣す。

其夜初更（戌の刻）、東軍清洲を發し木曾川東南の岸に臨みて陣す。四更（丑の刻）、輝政兵を發す。一柳直盛、尾州黒田邑を領し素地利を諳しる。故に他人をして先に渡らしむるを欲せず、頗る忿言有り。諸將之を和解し輝政をして先鋒せしむ。伊本清兵衛忠重先に渡り直盛之に次ぐ。大全

二十二日黎明、正則、諸軍に下令し將に犬山を攻めんとす。敵之を謀うかがひ聞き、走り犬山に告ぐ。守將石河先吉、援を岐阜に乞ふ。秀信、稲葉貞通・其子典通等を遣はし之を援く。城兵頗る滅し果たして正則の料る所の如し。合戦誌・餘史 一柳直盛部兵を率ゐ衆に先んじ下流を渡り、堀尾忠氏相踵して渡る。輝政・幸長・直政・

忠勝流れを絶ちて進む。大全・合戦誌・餘史 百百越前守三千余騎を率ゐ新加納に陣し数

百銃を連発し之を拒ぐ。東軍死傷頗る多しと雖へども一に顧みる所無し。家忠日記・

餘史 忠氏の兵山田多門兵衛級を獲ること第一。直盛衆を麾し直進す。其兵大塚権大

夫は勇力兼人（二人分）敵兵津田善兵衛・津田忠左衛門二人を斬り其級を獲る。敵の

隊將飯沼小勘平と闘ひ死す。池田長吉手づから小勘平を斬る。卯より辰に至り兩

軍大いに戦ふ。敵兵敗走す。大全・合戦誌・餘史 輝政の兵藤田権左衛門を斬る。家忠日記

監使兼松正吉、津田藤三郎元房と槍を接す。河中の流れ駛はやく決する能はず、元房

引き去る。其父藤右衛門元綱と殿を為す。元綱二郎左衛門元定子、諸書作藤左衛門或藤兵衛。今從

大全及津田系図。初事村柴（羽柴力）秀勝、秀勝卒、事秀信。後事池田輝政更称筑後 堀尾忠氏の兵進み前

路に邀まつ。元綱父子力戦し創せられ僅かに免れ岐阜城に入る。大全・合戦誌・餘史。但餘

史作元房被虜誤○津田系図曰、秀信先鋒、木造兵庫・百百越前・入江左近・武市善兵衛等接敵、屢戦。秀信遣元綱及

男元房視之。父子承命未到而我軍敗績。父子指揮敗軍離群為殿。附以備考 秀信一千七百余兵を將ゐ川手

邑閭魔堂に陣す。前軍使を馳せ戦敗るるを告ぐ。秀信兵を引き還る。輝政・長吉・直盛・忠氏・幸長等兵を進め合せ撃つ。敵軍支ふる能はず終に潰走す。我兵二里ばかり追撃し凡そ七百級を獲る。合戦誌作二百二十七級。今従家忠日記及大全敵將木造壹忠・百百越前守・飯沼十左衛門等つばし数還り戦ふ。日將に晡ほ(日暮れ)ならんとす。諸將、軍を斂おさめ還る。其夜、芋島新加納に屯す。大全城兵布施屋に出で陣し我兵の新加納を破り勝に乗じて進むを見、交鋒する能はず引き退き城に入る。家忠日記・慶元記・合戦

誌・餘史・関原軍記・松栄紀事 福島正則、細川忠興・京極高知・加藤嘉明と尾越渡に至り竹鼻城を先攻せんと欲す。秀信、毛利掃部・花村半右衛門・梶川三十郎をして竹鼻を援けしむ。柵を河西に設け銃を列ね厳しく備ふ。諸將下流加賀井村より筏を以て兵を渡し將に其後を邀たんとす。援軍之を見柵を棄て第三城に入り守る。我兵之を急攻す。福島正之街口を破る。掃部・半右衛門・三十郎力屈し出降す。大全

載一説曰、或云、三人脱去還岐阜城。今従正文 城主杉浦五左衛門 大全作五郎左衛門、今従合戦誌・餘史 牙

城に抛り拒戦す。我兵進み四面より攻め之を抜く。五左衛門城に火をかけ自殺す。

大全・合戦誌・餘史 諸將進み多羅尾堤に陣す。或作太郎堤、国音相通 昏に及び輝政の新加納

の捷報至りて曰はく、「今日戦疲れ岐阜山下に休し將に明日を以て城を屠らんと

す」と。正則大いに怒りて曰はく、「彼搦手を為し我追手を為せば則ち其所為（しよい）（ふるま

い）専恣（わがまま）なり。我輝政を以て敵と為し之を撃たざるべからず」と。細川忠

興諫めて曰はく、「輝政の言も亦理無きに非ず。彼力を尽くし川を渡りて既に城に

迫れば則ち何ぞ東手（末）して前鋒の至るを俟（ま）たんや。況んや吾曹彼と相距つること五

里。夜半兵を出し之に赴くに如かず。若し輝政我先んじ城を政め（攻）ば則ち直ちに

大垣に至り三成を撃ちて生死を決せん。渡河・拔城輝政両つながら得ば則ち吾曹

何の面目ありて人に見えんや」と。正則之を然りとす。合戦誌曰、加藤嘉明諫正則。今從細

川家傳録 其夜二更、諸將蓐食（じよく）し（早朝食事をする）岐阜城下桑本原に至る。

二十三日昧爽（まいそう）（夜明け）、諸軍皆至る。正則使を輝政の陣に遣はして曰はく、「子何ぞ

負約して昨日先に敵と戦ふ。今又何なん為すれぞ馳せ至る。子若し城を攻めば則ち子と決戦し以て其怨に報いんと。輝政争はずして曰はく「固より烽を見兵を進めんと欲するも敵陣河上に鳥銃を連発す。勢已むを得ず渡水し接戦す。今日の事、子追手を攻め吾搦手を攻む。前約の如し」と。正則意解け乃ち軍列を定む。合戦誌曰、

正則単騎来覓（もとめる）輝政。輝政在後陣未来。正則見輝政子武威守利隆責（責）其負約。利隆年幼不对。伯父次

兵衛代之対曰、云云。今従大全○細川家傳録曰、輝政馳至争先。忠興及加藤嘉明諭曰、前鋒在正則則非佗軍之所争也。

於是正則先進兵忠興・嘉明繼之。附以備考 正則及細川忠興・京極高知・加藤嘉明、岐阜外郭を

攻め浅野幸長・一柳直盛、瑞龍寺寨を攻む。是に先んじ、秀信寨を瑞龍寺稻葉山に築き以て東軍を拒ぐ。石田三成、榎原彦右衛門・川瀬左馬助を遣はし之を援く。

幸長五千余人を分け三隊と為し其宰浅野左衛門・浅野右近をして各一千五百人を將ゐる先鋒を為さしむ。自ら二千余人を將ゐる西南より登り之を攻む。先鋒寨に迫り、彦右衛門及び弟彌助矢石を放ち之を拒ぐ。彌助寨を出で左軍浅野右近の陣を衝く。

右軍浅野左衛門將に横から之を撃たんとす。彦右衛門出で左衛門の陣を衝く。先鋒三千人、榎原兄弟六百人の破る所と為り崩壊すること一町余。幸長衆を励まし大喊し進む。山麓より先鋒勢に乗り陣を整へ力戦す。敵兵退き城中に入り簀戸を闔づ。林水右衛門簀戸を攀よぢ力を抜き戸繩を截断す。敵兵と相搏ち終に其級を獲る。是に於て幸長及び一柳直盛の兵進み城中に入る。城兵戦ひ敗れ彦右衛門槍を提げ奮闘す。幸長の兵杉澤源之丞、之と闘ひ其首を獲る。彌助も亦戦死す。大全本書

載一説曰、幸長醜榎原兄弟之首伝之江戸。神祖入大阪梟之於粟田口 川瀬左馬助岐阜城に走り入る。井

伊直政、稻葉山寨を攻め之を抜き二寨皆破る。徳川記・合戦誌・餘史・松栄紀事 諸將岐阜

外郭に進攻す。正則、猶ほ輝政の、功を奪ふを慮り火を縦ち市麿てん(街)を焚き以て

其来路を塞ぐ。輝政怒然たり。其父勝入嘗て犬山城主たり。故に能く地形を(語・し)諸る。

進み岐阜山の後長柄川より水路を取り牙城に直行す。松栄紀事曰、正則先衆入城。輝政従後放

火。誤矣。今従家忠日記・慶元記・合戦誌・餘史 城將津田元房京町口を守り諸口を見る。守兵皆

退き火を街口に縦つ。引き城下に入り東兵を拒がんと欲す。瑞龍寺の敗兵来奔重沓し城兵頗る騷擾す。細川忠興幾(二機)を見、兵を進め、其弟興元衆を励まし競進す。沼田小兵衛後更称長岡勘解由第一槍を為し、其余の忠興の兵血戦し功を著す。城兵戦ひ敗れ退き、七曲口を守る。津田元房馬を馳せ士卒を指揮す。興元の兵澤(田)曰次郎助之と相搏ち、勝たへず、元房之を斬る。従兵をして其首を提げしめ亦七曲に退く。正則の兵梶田新助敵五人と槍を接し一人を撃ち殺し其首を取る。福島伯耆力戦し功有り。大橋茂右衛門、木造壹忠と槍を接し創せられて退く。城兵本間五郎八臂力(りよりよく腕力)人に邁すぐ。眉尖刀を揮ひ東兵七八人を殺傷す。嘉明の兵守岡半三郎年甫十六、之と相搏ち之を刺殺し終に其級を獲る。壹忠衆を督し拒戦す。正則・忠興・嘉明三将並び騎し阪曲に督戦し武藤皆に至る。城兵再び還り闘ふ。我兵少し却く。京極高知荒神洞より登り横から撃ち之を攻む。敵兵阪曲の険を棄て城中に引き入る。忠興の兵澤村才八吉重後称大学自ら姓名を呼び城兵中島傳左衛門・齋藤

一左衛門・伴吉右衛門と槍を接し相争ふ。一左衛門傷して退く。吉重創七つを被りせうり幾んど危し。槍を捨て進む。傳左衛門と相搏ち岸下に墮つ。吉右衛門槍を投げ之を縦き誤ち傳左衛門の脅わきに中つ。吉重終に其首を取る。忠興の長子忠隆、正門の右に迫り指揮督戦す。其兵米田與七郎年十五後称長岡監物先登し壘せまに摩る。松井民部佐渡子、後称長岡佐渡正門に戦ひ創せらる。正則の兵吉村又右衛門城門を攀よぢ櫓に登る。遠山長右衛門後仕麾下更称大道寺内藏・杉原自間相継ぎて登り認旗を出だし我兵を招く。長尾隼人城中に超え入り第三城門を開く。忠興・嘉明・高知の兵第二第三城を攻め破る。城兵支ふる能はず牙城に退き入る。合戦誌・餘史・慶元記互有異同。今従大全 本多忠勝も亦兵を率ゐ来会す。我兵奮撃し城将飯沼十左衛門等三百余人を斬る。山内一豊浄土寺口より、一柳直盛瓜生口の先登として皆入り牙城に迫る。正則、衆に先んじ將に城に入らんとす。都政朝日口より進み旗を城中に投げ高く呼びびて一番乗と曰ふ。諸軍相継ぎ競進す。合戦誌・餘史・慶元記 木造壹忠、正則の兵澤井左衛

門・森勘解由に就き秀信の為に降を乞ふ。正則之を許す。秀信將に自殺せんとするも正則固く之を止む。奥州軍記曰、城陥秀信將自殺輝政止之。合戦誌・餘史・慶元記・関原軍記並云、

木造左衛門佐之和。徳川記・合戦誌・慶長一統記曰、澤井左衛門・森勘解由成和議。今従之。松栄紀事曰、正則執秀信。創業記亦云、岐阜中納言被虜。大全但云、城兵乞降及無秀信將自殺正則執之等事。蓋秀信既降、其状与因虜等。

故二書云然耳 正則入り城を取らんと欲す。輝政怒りて曰はく「先に城に入る者は我なり。城を取り秀信を拘ふるは我に非ずして誰ならん」と。正則聴かず。両将相争ひ將に鬪はんとす。直政・忠勝、輝政を諭して曰はく「大敵前に在り。今私念を以て相争ふは忠に非ざるなり」と。輝政之に従ふ。乃ち両將の兵をして城を成らしむ。輝政、秀信を上加納邑に幽し諸將檄を飛ばし捷を江戸に告ぐ。家忠日記・大全・

合戦誌・餘史・慶長一統記・松栄紀事 大全・合戦誌・餘史並云、秀信移自上加納居尾州智多郡。十月入高野山、明

年卒。又按ずるに、合戦誌曰はく秀信加納道場に在り落髪し其臣和田孫大夫に謂ひて曰はく「汝須らく大阪に往き我妻子を取りて還るべし」と。孫大夫大阪に至り秀信の妻及び二歳の男子を取り將に東歸せんとする中路に事覺られ追

ふ兵之に迫る。孫大夫、秀信の妻を殺して自尽し弟大藏をして嬰兒を抱き逃げ去らしむ。大藏帰るを得嬰兒を撫育するも明年三歳にして夭す。信長の嫡統遂に絶つと。餘史曰はく、秀信其臣和田大藏をして潜かに母妻及び二歳女子を將み城を出でしむ。母妻疲れ行く能はず遙かに城陥つるを見交刃して死す。幼女僅かに免るるを得。既にして秀信出降す。母妻既に死す。時の人之を悲しむと。二説未だ孰れ是なるかを知らず。所以備攷 正則、木造壹忠、秀信に忠を尽くすを称し、召し己の臣と為す。輝政も亦津田元房の善戦を称し以て

己の臣と為す。大本書曰、乱平、正則封于安藝召壹忠於廣島、與其宰福島 丹波・小関石見並給二万石。壹忠

避与正則同称、更大膳。合戦誌曰、細川忠興之士富田八大夫与津田藤三郎接槍衆競集遂擒之。蓋輝政惜其村（ママ）

武积之也。今従大全

臣按ずるに、将帥功を争ひ忿戾（ふんれい）（かつとして争う）狼闘（こんとう）（いがみあう）する者古より多し。

晋の王渾・王濬、宋の沈田子・王鎮悪、隋の韓擒虎・賀若弼是れのみ。渾将に

濬を攻めんとし、田子、鎮悪を殺す。若弼相話し刃を挺くに至るも亦己に甚だ

し。然して鼓を提げ金を ち三軍の死命を制す。蘭相如・憑異の徳量自非者（有）

るに非ざるによれば）則ち能く謙遜し功を譲ること鮮すくなし。福島正則・池田輝政、岐阜の功を争ひ幾んど交鋒に至る。苟しくも井伊直政・本多忠勝の正言曉譬に非ずは則ち田子・鎮悪の禍殆んど將に当時（今に）に起きんとす。両雄俱に斃れて敵其弊に乗らん。是に由り之を觀るに、神祖、二人を以て軍監と為す、豈に啻ただ敵を料り勝を制するのみならんや、亦諸將を調停して師克よく和在らんと欲すればなり。

石田三成、岐阜の困を聞き急ぎ前鋒舞兵庫・杉江勘兵衛・森久兵衛をして諸書或作

九郎兵衛今從大全 兵三千を將ゐ之を救ふに合渡堤に陣せしむ。三成及び島津惟新、呂

久河上に屯し小西行長・福原直孝後拒を為す。創業記・大全・合戦誌・餘史 黒田長政・藤

堂高虎・田中吉政・生駒一正、相謂ひて曰はく「福島・池田、岐阜を攻め之を抜

く。吾輩の道路遷うつすに遠く戦期に会せざるは頗る遺憾たり。此敵を撃破するは吾

輩の任なり。進み合渡に至り之を迎撃せん」と。吉政其兵纔かに一十一騎と茱萸くみはら原

より流れを截りて渡る。大全曰、吉政臨河岸謂其率大三郎右衛門曰、汝善泅（泳ぐ）則宜測淺深。三郎右

衛門辞之。吉政怒揮眉尖刀曰、不渡則斬汝。三郎右衛門不驚曰、臣若溺死則恐損兵氣故辞測之。何難之有、即入河水、

及両乳吉政見之遂渡。賞其功授氏曰、合渡三郎右衛門、給三百石。以為士流。大全・一説・合戦誌・餘史・勇士一言

集各有異同。今拋大全文附于此 長政其れに憤り吉政より後に経路を取らんと欲し戦に先

んじ直ちに上流藤内瀬を渡る。其臣黒田三左衛門一成 後称美作、剃髮号睡鴨 中流にて

高く呼びて曰はく「黒田甲斐守今日先登す」と。長政、兵庫の陣に進撃す。勘兵

衛・九兵衛及隊将村山理介・渡邊新之助等兵を督し之を拒ぐ。長政電撃し手づか

ら新之助を斬る。一成、理介を斬る。従兵各勦戦し一百二十級を斬る。大全・合戦誌・

餘史。但合戦誌作三百余級。今従餘史 吉政河を先渡すと雖へども敵と遼か隔たり合渡堤の傍

らに馳せ下る。高虎下流を涉り相与に奮撃す。敵猶ほ拒戦す。生駒一正・寺澤廣

高・戸川達安・桑山元時等渡河競進す。兵庫、其の敵すべからざるを知り兵を麾

して退く。杉江勘兵衛勇力を以て称せられ数闘に還る。吉政の兵西村五右衛門 先

臣佐佐宗淳曰、諸書或作辻勘兵衛誤。大全・合戦誌亦作五右衛門。今從之。之と槍を接す。勘兵衛戦ひ疲れて傷す。吉政の近習松原善左衛門其級を獲る。大全・合戦誌・餘史並云、五右衛門以槍縦、勘

兵衛斃之。善左衛門年十八。初莅（のぞむ）陣進將取首五右衛門叱之言（吉）政馳馬而過見之曰、汝屢著戦功。善左

衛門初獲首級。宜讓其功。五右衛門不能争竟為善左衛門之功。森九兵衛僅かに免かれ走げ歸る。長政・

言政・高虎、敗兵を追撃し呂久河上に至り以て土馬を休む。惟新使を三成の陣に

馳せて曰はく「先鋒利を失ふと雖へども我足下と陣を整へ横から撃たば則ち必ず

勝を得ん」と。三成可きかずして曰はく「東兵競進し想ふに岐阜城必ず陥ん。今岐

阜を援くる能はずして此地に戦はば則ち敵兵勝ちに乘じ其鋒当り難し。退軍し以

て後拳を図るに如かず」と。乃ち兵庫・九兵衛等敗兵を率ゐ大垣城に還る。惟新

已むを得ず兵を引き城に入る。敵人皆三成の失機を咎む。大全・合戦誌・餘史・○大全曰、

合渡之戦黒田長政之兵神吉小助接槍第一。敵可十人横（さん〃あつまる）槍刺之。小助被十余創。然不甚重昇至長政

前、小助以為与我争前後者唯主人長政一人。乃睨視長政励声曰、今日之戦可無一人先我者。長政曰、然傷者不可励声

損氣。使人扶、之浴于有馬温泉創愈而還。長政厚賞之。又曰、長政追擊舞兵庫、人馬誤墮塹中。水甚深、（兜力）

登上水牛坂角纔見。其兵堀平右衛門・林五助馳至救出之。平右衛門使長政乘己馬奪五助之馬騎之与長政還。敵五助率

出長政之馬於塹中騎之。亦同逐敵。並附備攻。藤堂玄蕃良政 合戦誌・餘史並曰、良政初為関白秀次之近臣。

秀次死、高虎以同姓故招之豫洲而厚遇之。高虎從東征自大阪寄書良政付託留寄之任。良政不聽。高虎強之再三。良政

固不応至是誓決戰死。以遂具（其）志 先に諸將赤阪駅に至り居人皆の安堵を諭告す。三戸を

毀ち以て之を焚き放火の徴と為す。諸將継ぎ便を屯軍に至す。皆喜び高虎其功を

賞し手づから唐冠の首鎧を授く。長松城主武光式部、合渡の戦に東兵大捷するを

聞き襲ふ所と為るを懼れ城を棄て桑名に奔り氏家行廣に依る。梶村の戦に式部、

丸毛三郎兵衛を救ふ能はず今又敵を見ずして走<sup>に</sup>ぐ。人皆其怯を笑ふ。 大全・合戦誌・餘

史 諸將赤阪駅に進み入り虚空蔵山に屯す。大垣を距つること五十余町。是日より

九月下四日に至り両軍相持す。 家忠日記・慶元記・合戦誌・餘史・関原記○合戦誌曰、石田三成乗福島

正則在赤坂欲襲取清洲城与増田長盛議。長盛曰、織田常真尾州旧主也。以其養於国司其教伊勢亦故国也。今以常真為

将使徇伊勢則旧臣鼠伏（そふく）山谷者争出赴之。率之以攻清洲則可得志。三成然之。以佐久間不干齊為使説之。常真從之。時大野宰相帰款神祖。在北国。常真遣使告之。宰相大驚遣其臣村瀬左馬助重治諫正之。常真不果行。按ずるに、大野宰相、常真の子秀雄なり。三成に党し関原に軍す。乱平し神祖特に其の罪を赦し之を放つ。而して神祖に帰款と云ふ。非ざる事と疑ふ。且他書載せざる所故取らず。故不取（以上三文字衍字）是に先んじ、備前中納言宇喜多秀家、兵一万五千余騎を將ゐ太田に屯す。大垣と相距つること七里。東軍赤阪に屯するを聞き、兵を引き大垣城に入り石田三成と合ふ。三成大いに喜び先に使を遣はし之をた搞たく（訪問する）。秀家其使に謂ひて曰はく「勝を制するはろういつ勞逸（精出すこととのんびりすること）に在り、今日岐阜合渡の戦に敵兵甚だ疲る。今夜寨をおひ却ちかさば必ず奇捷を得ん」と。三成之を聞き又使を遣はして曰はく「公の策誠に善し。然れども軍事倉猝たるべからず。須らく島津・小西等と議り之を決すべし」と。秀家怒りて曰はく「兵疾速を貴ぶ。多議に在らず。今諸將と会議せば必ず事機を失はん。子し出づるを欲せずは則ち吾將に孤軍決戦すべし」と。三成乃ち秀家の言

に抵りて曰はく、「島津・小西等諸將軍事に老す。皆夜戦最も難しと謂ふ。且地勢沮洳そじよ（湿地）たり。進退甚だ艱し。秀元以下の諸將勢洲より軍を還し来会す。輝元出軍し亦皆進むに在り。須らく大軍の来集を待ち然る後に一挙に決勝すべし」と。秀家曰はく、「輝元出軍せば則ち内府も亦力を出す。敵勢鈞ひとしく孰たれか勝負を知らん。然して島津は老将吾曹は後生。晩輩（後輩の自称）其の言に従はざるべからず。他日子悔しいる勿かれ」と。遂に寝むや。大全・合戦誌・餘史○大全曰、宇喜多左京・戸川肥後從諸將征西。聞秀家在大垣遣使勸歸順至於再。秀家固拒之。或論宇喜多曰臣叛去曰秀家視臣如土芥寇讐之。報不亦宣乎。撰大全者宮腰秀與弁此事曰、左京・肥後頻勸歸順非出於誠心。何則征西諸將臨發。神祖面諭曰、諸軍至清洲則廣設方略使敵將歸正其功倍於攻戰。二人間此命專為功利。縱誠心為秀家此小補也。去年興岡豊前・花房志摩給党叛秀家。終使秀家失八万石之兵馬。此大罪也。焉得償哉。此論頗確故附于此。按ずるに、宇喜多左京、是時阪崎出羽守と改稱す。今本書により其旧称を挙ぐ、伊賀上野城主筒井定次小山營に在り。長束正家兵を將ゐ上野城を攻む。定次守る処の臣、正家の兵多きを畏れ拒戦する能はず。城を授けて去る。定次之を

聞き大いに怒る。然れども之を如何ともする無く従兵を率ゐ諸將と赤阪に營す。家

忠日記・徳川記・大全・合戦誌・餘史

二十四日、世子、宇都宮を發す。家忠日記・慶長記・徳川記・慶元記、並曰、發江戸。按ずるに、世子

未だ嘗て江戸に還らず。諸書誤れり。今從創業記・松栄紀事○大全曰、中根大隅守入道宗間近年猶存自言面見神祖。

秀（忠）公同時發江戸。然世子是日実出宇都宮二十八日至上州松枝。蓋宗間見九月朔所從世子諸將發江戸云然耳 東

山道より美濃に赴く。參河守秀康、之を出で送り、互いに馬を路上に立て密語し

て別る。大全 榊原康政・酒井宮内大輔忠勝 左衛門尉家次長子 ・本多忠政・本多康重・

大久保忠鄰・其子加賀守忠常・叔父忠佐・本多正信・酒井重忠・其子忠世・弟酒

井忠利・其子與七郎忠勝 後任讃岐守為猷廟元老、致仕号空印。按ずるに、当時酒井氏に二忠勝有り。其一

上に見ゆ ・森忠政・諏訪頼水・小笠原秀政・小笠原信之・仙石秀久・眞田信幸・日

根野高吉・石川康長等之に従ふ。總三万八百余人。創業記・家忠日記・慶元記・合戦誌・餘史・

松栄紀事諸書作三万八千七十余人。家忠日記七十作七百。今從大全 毛利秀元・吉川廣家・長束正家・

長曾我部盛親・安国寺瓊等三万余兵を率ゐ東正山に屯す。二十二日より安濃津城を攻む。富田知治兵二千五百人を率見し城東を守る。合戦誌・餘史並云、一千六百人今從大全分部光嘉乙部口を守り、松阪城主古田重恒、小瀬四郎右衛門・林總右衛門等を遣はし之を援く。巖田口を守り相与ともに拒戦す。城の西北に西来寺伽藍有り。頗る大なり。二十四日城兵相議るに、敵之に登り城中を俯窺ふせば則ち防禦し難しと。是日、火を縦ち之を焚く。北風猛烈に街市に延及す。敵將宍戸備前守勢いに乗り急攻す。光嘉槍を揮ひ力戦し敵数人を殺す。備前守と槍を接し其左脇を傷す。光嘉も亦創せられて退く。敵兵急ぎ之を追ふ。光嘉胡床こしょう（腰掛）に踞まし將に自殺せんとす。知治の宰本多志摩馳せ至り光嘉に勧めて曰はく「其れ徒死せんよりは入城固守するに如かず。力尽きなば則ち死なん。死は未曉なり」と。光嘉之に従ふ。大全・合戦

誌・餘史○四家合考曰、分部左京亮状貌魁偉膂力過人。信濃守恐其有異図、使之出守城南街市。敵攻外郭左京亮出闘

却敵七次。附以備考 敵南門を攻め破り第三城を取り將に第二城に入らんとす。城兵苦戦

し之を却く。上田吉之亟健闘し勇を奮ふ。先臣佐宗淳曰、吉之亟右馬芸冠天下、初仕関白秀次、

中任（仕）知治、後仕蜂須賀至鎮 敵兵敗走し秀元怒り衆を督し競進す。知治門を開きて出

づ。士皆殊死戦ひ敵兵披靡す。時に華鎧を被る者知治の側に來在する有り。則ち

其妻なり。宇喜多安心之女阪崎出羽守孝親之妹 知治戦死すと聞き、出で共に死なんと欲す。

本多志摩、知治を諫むるに、光嘉に勸むるが如くす。知治之に従ひ其妻と牙城に

退き入る。志摩、光嘉の宰右馬助と、敵を梶ふせぎ二人力戦し死す。城兵の死者五百

八十人。敵兵戦ひ疲れ木柵を立て竹牌を列ぬ。明日を以て牙城を取るを期す。家忠

日記・徳川記作二十六日。大全二十三日。餘史並存兩説。今從合戦誌・毛利家記 高野山僧興山講和に來。

興山世称木食上人 知治、聴かず。興山曉譬すること再三。知治之に従ひ光嘉と城を出

づ。知治一身田専修寺に入り雑染後高野山に入る。秀元、滝川豊前守正弘・蒔田

權之助・中江式部少輔景繼・山崎右京亮・川口久助をして城を成らしむ。松阪の

援兵各戦功有り。歸るに及び古田重恒其の軽重に随い之を賞す。家忠日記・徳川記・慶元

記・大全・合戦誌・松栄紀事 敵将秀元、廣家・正家などを率ゐ美濃路に向かひ大垣の西、

南宮山栗原山に屯す。大全・松栄紀事○毛利家記曰、秀元自伊勢引兵至養老原移屯雞籠山。豈同地而異名乎。

未詳 古田重恒以為へらく敵将安濃津城を抜かば則ち必ず松阪城に来攻せんと。兵七

百余人を整へ号令を定め守備を厳めいまし以て之を待つ。秀元・正家、鍋島勝茂をして

松阪城を攻めしむ。勝茂将に松阪に赴かんとするに、宇喜多秀家・石田三成大垣

より急歩を差し報せて曰はく「東兵岐阜城を抜けり。諸将須らく亟やかに来会す

べし」と。故に勝茂松阪城を攻めず兵を引き大垣に至る。大全○合戦誌・餘史並曰、勝茂攻

松阪城重恒抛險拒之。松阪城三面有深沼前帶大河、不得輒攻。勝茂以て其父直茂密通款于神祖。幸其險要故緩攻撃。

自八月二十一日相持至九月中旬聞関原戦敗退遂引兵去。九月十五日勝茂与敵諸将出陣于関原未嘗攻松阪城也。故不取

是に先んじ、小出播磨守秀政 五郎左衛門政重子 片桐且元相議り中江景継・川口久助を

大阪城中に召し謂ひて曰く「秀頼公幼稚にして関東と難を構ふること絶えて知ら

ざる所なり。然れば内府の心付度すべからず。宜しく急ぎ関東に赴き此意を陳ぶ

るに備ふべし」と。二人大阪を出で関東に往く。増田長盛・長束正家書を以て之を止めて曰はく、宜しく安藝宰相秀元に属ししよく以て安濃津城を攻むべしと。二人以爲へらく、然るべからず。戦場に赴かずして関東に使用するは、恐らくは戦を避くるの譏そしりあらんと。故に馬を回し伊勢路に赴く。神祖、二人使を奉して来るを聞き大いに喜ぶ。既にして安濃津城を攻むるを聞きよこ懼こばず。乱平し二人高野山に遁る。神祖、伊達政宗をして之を拘へしむ。後に攻城二人の意に非ざるを聞き之を積す。大全本書曰、神祖欲召二人隸麾下。式部少輔不從命。流寓京師、寛永中病死。而不書久助之事。蓋任麾下也

豊臣秀秋、使を遣はし通款すと雖へども神祖猶ほ未だ之れ信ぜず。黒田長政赤阪に至るに及び、使を平岡頼勝の營に遣はし質を交ふるを請ふ。秀秋之を許す。頼勝の弟出羽を以て質と爲し、長政其臣二人を以て質と爲す。固く盟約を定む。め吉川廣家、福原越後と計を定め抛毛利家記毛利秀元に帰順を勧む。秀元之を拒みて曰はく、「吾幼弱なる嗣君を棄てて関東に属する能はず。且は大人の命無し。安ん

ぞ敢へて其所為を肆ほしいままにせんや」と。廣家曰はく「諸將、太閤の恩春(普)を蒙る者皆内府に属す。西軍敗亡し翹足(足をつまだてる)して待つべし。速やかに降旗を豎て輝元卿の危難を拯すくひ以て宗国を保つに如かず。孝莫大なり」と。秀元之に従ふ。廣家書を長政に貽おくり密かに之を告ぐ。長政報して曰はく「今款を内府に送り須らく陣に臨み諸將の来降を誘ふべし。然らずんば則ち敵軍に反撃し以て帰順の志を明らかにせよ」と。秀元曰はく「長束・安国寺・長曾我部等皆我麾下にして叛去者に与し之を撃つべきに非ず。情として忍びざる所なり。但だ当に陣を堅め動くこと勿く、以て送款の徴しるしと為すべきのみ」と。廣家輒ち福原左近・栗屋十郎兵衛を以て質と為し亦其約を定む。大全。左近輝元重臣氏部少輔廣俊弟。十郎兵衛、廣家重臣○大全載一説曰、神

祖至岡山吉川廣家・福原越後來謁。神祖留之付黒田長政。以為質。大全并之曰、福原左近出為質謬。為越後。関原之戦廣家在南宮山堅陣不動。而謂神祖留之誤矣。附以備考

二十六日、池田輝政の岐阜捷書至る。是に先んじ、神祖、安藤巖之助正次を以て

使と為し 正次、治右衛門定次子後襲称治右衛門 諸將を勞問し戰場を按行す。

是日、帰る。岐阜城陥ち合渡戦勝するを報ず。神祖敵の屍何方に向くかを問ふ。

対へて曰はく「西に大垣を向く」と。神祖審かに諸將追撃の功を知る。 家忠日記・餘

史・鷲峯文集・安藤正次碑並云、神祖ト（うらなう）其敗兆。今從大全 井伊直政・本多忠勝定議し一柳

直盛をして長松城を守らしむ。大垣の敵兵城を攻めば則ち諸將をして之を援けし

むと相約す。長松城、赤阪營を距つること頗る遠く去る。大垣城甚だ近し。直盛

の寡兵善く守る。人を采邑黒田に遣はし旌旗数十旒しゅうを取り城四面に建つ。多兵と

佯り為し以て敵を誑あやむく。屢大垣の間諜を捕へ赤阪營に送る。 家忠日記・合戦誌・餘史 石

田三成、福原直孝と定謀し謀四人を遣はし長松城に行火こうかす（火を付ける）。直盛之を覺

り皆之を捕へ斬る。 大全 岐阜の敗兵清水邑に屯聚す。井伊直政之を攻め破る。敵兵

大垣城に奔り入る。 合戦誌 西尾豊後守光教 出雲守信光子・松下右兵衛佐吉綱 加兵衛之綱

子曾根旧壘を成（成）る。敵將島津惟新、楽田に陣し数之（数）を侵掠し火を街衝（衝）に縦つ。

直政、本多忠勝と議り水野勝成をして之を援けしむ。惟新又之を襲ふ。勝成堅守し之を拒ぐ。惟新復攻むる能はず。直政・忠勝、曾根を以て大垣を攻むる要路とす。松平康長をして之を助け守らしむ。家忠日記・大全・合戦誌・松栄紀事

二十七日、神祖書を池田輝政及び身(弟)長吉に賜ひ岐阜の戦功を褒む。大全

二十八日、藤堂高虎の使来。諸將の捷報相継ぎ至る。

二十九日、神祖書を福島正則・浅野幸長・黒田長政・加藤嘉明・細川忠興・堀尾忠氏等に賜ひ其の戦功を勞ひ西征近きに在るを諭す。又書を浅野長政に賜ひ幸長の戦功に報ゆ。且、長政をして東山道に赴き世子軍に従はしむ。長政及び大野治長・土方雄久、去年讒せられ廢徙す。是に至り冤えん枉おう(無実の罪)雪すすくを得。又書を最上義光・伊達政宗・堀美作守親良に賜ひ岐阜の捷を告ぐ。家忠日記・大全・合戦誌・餘史・

松栄紀事。親良秀政第二子秀治弟 譜第將士をして関東の諸城を分け守らしめ、松平忠利をして小美川を守らしむ。忠利辞して曰はく、「臣の父家忠、伏見城に死す。臣此に

留むる能はず。願はくは大駕に従ひ父の戦所を見ん」と。神祖曰はく、「汝の言是と雖へども景勝も亦勅敵（強敵）なり。小美川は形勝の地なり、汝堅守し之を拒ぐべし」と。忠利再び辞し聴かざるも遂に小美川に赴く。鷲峯文集・深溝本光寺碑・松栄紀事 諸將大垣を破り京師に入らんと欲す。藤堂高虎、本多忠勝・井伊直政と謀りて曰はく、「宜しく大旆の至るを待つべし」と。諸將みな曰はく、「岐阜已に破れ賊党の膽寒からん。此畏縮の機に乗りて大垣を攻むるは猶ほ破竹の勢のごとし」と。高虎曰はく、「然らず。吾輩敵を破り長駆す。若し大軍の後継無くして敵其前を遮り又其後を擁せば則ち進退必ず危ふし」と。諸將皆其議に服し遂に赤阪やどに次り以て之を待つ。高虎

行状但本書大垣作関原。按ずるに、此れ三成を待ち未だ嘗て関原に出軍せず。故に之を訂す

九月朔、神祖江戸城を発す。異父弟松平康元をして大城に留守せしめ、石川家成之に副ふ。武田信吉をして西城に留守せしめ、松平康直之に副ふ。餘史・松栄紀事並曰、

家成・定盈・頼忠留守西城。今従合戦誌○合戦誌云、松平源七郎康忠後為備後守。按ずるに、松平上野介康忠初め源

七郎と称す。然るに文禄二年卒し其子康直源七郎を襲稱す。天正十年に注す 菅沼定盈・諏訪頼忠・内藤

仁兵衛忠政 三左衛門信成弟 ・柴田康忠・松平伊昌・三浦監物・高木廣正・土岐十三郎・

設楽貞通等処守し(あとに留まる)、板倉勝重を以て町奉行と為す。合戦誌・餘史・松栄紀事 家

成密かに神祖に白して曰はく、「今年西方塞す。願はくは、方忌を避くるの礼を行

ひ然る後に発駕せんことを」と。神祖曰はく、「西方塞せば則ち吾伐りて之を闢く。

何の憚ること有らん」と。遂に馬を進む。大全・合戦誌・関原外記・松栄紀事 酒井作右衛門

雅楽頭正親弟、河内守重忠伯父 ・村串與三左衛門 按ずるに元龜三年一言阪の戦に村越與三左衛門戦功有り。

村越・村串国音相近し。疑ふらくは一人ならん。然れども考定する所無し。今本書書く所に従ふ 旗奉行と為る。

近藤秀用 石見守秀用子。抛諸氏傳略是時父秀用為井伊直政所錮(とじこめる)。不得従軍 ・大久保忠教槍

奉行と為る。渡邊守綱・伊奈圖書・成瀬正成・安藤直次等十五人弓銃隊將と為る。

米津清右衛門・小栗忠政・横田重量・初鹿傳右衛門・山本新五左衛門等二十四人

監使と為る。下野守忠吉・松平甲斐守忠良 因幡守康元子 ・松平豊前守勝政 源三郎康俊

子・松平右衛門大夫正綱 大河内金兵衛秀綱子松平甚右衛門正次子養之・松平家清・松平家乘・

松平家廣・酒井家次・松平忠明・松平康長・本多忠政・其弟内記忠朝・松平忠政・

本多康俊・本多正純・安藤重信・酒井重忠・其弟忠利・西尾吉次・奥平信昌・其

子家昌・戸田一西・其子氏鐵・永井直勝・大久保忠佐・内藤清成・丹羽氏信・阿

部正次・其弟正吉・青山忠成・其子伯耆守忠俊 後更播磨守・山口勘兵衛直友 後為駿

河守北條美濃守氏盛 美濃守氏規子菅沼大膳亮・天野康景・高木清秀・高力清長・牧

野康成・西郷家員・稻垣長茂・土方丹後守雄氏 河内守雄久子・遠山民部・大田重政・

津輕右京亮為信・大野治長・岡江雪等騎從す。兵合せ二万五千余人。 大全・合戦誌・松

栄紀事初め神祖以為おもへらく、福島正則素太閤の眷遇けんぐう（特別に目をかける）を被りひ且秀頼と

疏属（遠い親類）たり。其の三成に憾み有るを以て一旦我に属すと雖へども、三成事

を挙げ人心を扇動し秀頼を擁護するに託言すれば則ち備前中納言の誘ふ所と為る。

敵と合謀するも亦未だ料るべからず。正則ふたしん貳を懐かば則ち黒田長政以下諸將も

亦未だ必ずしも保つべからずと。故に岐阜城陥つるを聞き発駕すと雖へども未だ瞭あきらかにする能はず。然れども是に至り正則・長政又上書し必ず秀家・三成を誅すと誓ひ、以て駕を促す。神祖大いに悦び西上を決意す。大全是夕神奈川駅に至り、加藤源太郎を岐阜に遣はし、再び書を福島正則・池田輝政・藤堂高虎・黒田長政・田中吉政・一柳直盛等に賜ふ。岐阜城の功を褒め、且は須らく駕の至るを待ち、輒ち(たやすく)出兵せざるべきを以て諭す。又使を信州に遣はし、書を直田信幸に賜ひ以て西征を告ぐ。大全・合戦誌・松栄紀事是に先んじ神祖諸將を部分けし海道・諸城を成らしむ。菅沼志摩守定仍定盈子初称新八郎中村一學に代り駿府・興国寺二城を成る。内藤信成沼津城に在り、山内一豊に代り懸川城を兼ね成る。内藤紀伊守信政三左衛門信成子葦山城を守り、保科正光、堀尾忠氏に代り浜松城を成る。三宅康貞・其子起(越)後守康信、有馬豊氏に代り横須賀城を成り、本多康俊、池田輝政に代り吉田城を成る。本多康俊松栄紀事作松平家乗。今従大全松平左馬允忠頼内膳正家廣子田中吉政に

代り岡崎城を成る。合戦誌曰、松平三郎四郎成懸川。北條左衛門大夫成岡崎。松平左馬允成西尾。今從餘史。

櫻井松平系図・松栄紀事。拋大全先是北條氏勝助守岡崎城。敵將石川光吉棄犬山城出奔。故神祖使氏勝守犬山城而忠

頼独守岡崎城也 石川康通・松平家清、福島正則に代り清洲城を守る。松平家信・小笠

原信元・千賀孫兵衛、毛呂崎を成り九鬼嘉隆に備ふ。諏訪頼水高崎城を成り、京

極高知伊奈城を成る。仙石秀久小諸城を成り、日根野織部正吉明諏訪城を成る。

石川康長松本城・小田原城を成り、大久保忠鄰居る所の刈谷城、水野勝成居る所

なり。故に成將を置かず。松栄紀事曰、水野勝成代田中長頸成西尾。按ずるに、是時勝成出で美濃に在り。

紀事誤れり。今合戦誌・餘史に従ふ 郡上城主稲葉貞通・其子典通、石川光吉を援け犬山城に

在り。遠藤左馬助慶隆関東に通款す。神祖書を賜ひ之を嘉す。慶隆郡上八幡城を

取り以て其旧を復せんと欲し 按ずるに、遠藤系図、慶隆東下野守常縁五世の孫、小二郎胤直の子。世（よ

よ）郡上城主たり。更に遠藤氏從五位下に叙せられ但馬守を任ぜらる。合戦誌に抛れば石田三成之を讒す。秀吉公城

を奪ひ稲葉貞通に賜ふ。故に慶隆三成を怨す 井伊直政・本多忠勝に就き之を請ふ。直政・忠勝

之を許す。金森可重は其女壻なり。故に素玄父子をして之を援けしむ。家忠日記、金

森可重作西尾光教。誤矣。今從大全・合戦誌・餘史 慶隆兵を率ゐ東美濃より席田郡に至る。素玄・

可重長瀧口に向かふ。福島正則、稻葉貞通と旧有り。正則書を犬山に送り其帰款を勧む。貞通之に従ふ。故に直政・忠勝、慶隆・素玄に兵を弭やむるを諭す。二人答へて曰はく「今既に出師し勢遏とどむべからず。且右京亮父子犬山城に在るを見る。

去就未だ知るべからず」と。遂に八幡城を攻む。貞通・第二子修理亮通孝稻葉系図

無修理亮名。今拋大全・其宰稻葉土佐、士卒五百人と城を守る。慶隆・可重將に郡上の

故墟を取らんとす。通孝・土佐、兵二百人を分け故墟を守る。険に抛り之を拒ぐ。

可重の先鋒死傷頗る多しと雖へども力戦し故墟を奪ふ。貞通予め空濠を故墟・八幡の間に鑿ち木柵を立て鳥銃を列す。兵進むを得ず。素玄之を退けしむるを命ず。

慶隆、谷口櫻町に陣す。素玄父子と議り使を城中に遣はし之を降せしめんと諭す。

通孝・土佐伴いっわり誥こつ（つげる）し貞通の来援を俟まつ。慶隆退きて愛宕山に陣す。可重瀧

山に陣す。

三日晡時ひぐれ、貞通報を聞き急ぎ犬山を発す。夜を冒し軍を還す。

四日黎明慶隆の陣に進撃し大いに之を敗る。慶隆瀧山に奔り可重に依る。貞通竟に八幡城に入る。慶隆・素玄又使を遣はし之を諭す。貞通報かえして曰はく「我既に款を内府に送る。而るに不意に攻めらる。故に還り之を救ふ。今内府の命めい無くして城を授くるは不可なり。宜しく質を出だし講和すべし」と。慶隆・素玄之を許す。遂に貞通と平し質を取り兵を引きて還る。慶隆捷かちを関東に告げ以て己の功と為す。家忠日記・大全・合戦誌・餘史・慶元記

是日、世子信州小諸やどに次る。大全 眞田昌幸既に其長子信幸をして神祖に属するを許す。其勢之と争戦せざるを得ず。故に砦を小縣郡伊勢崎に築き少子信仍をして之に居せしむ。合戦誌・餘史・奥州軍記並曰、 数出兵し信幸の管内を侵掠し互ひに勝負有り。

九月五日世子至染屋邑使信幸攻伊勢崎砦。信幸設計攻拔之。左衛門佐退入上岡城。按ずるに、家忠日記・古簡雜纂、

載するに、九月朔、神祖信幸に書を賜ふ。敵阪戸を攻めば、則ち信幸をして之を援けしむと。蓋し是に先んじ信幸沼田に在り。信仍と接戦す。而れども是日の事に非ず。大全も亦其事無し。今大全・松栄紀事に従ふ

五日、世子使を上田城に遣はし昌幸を諭して曰はく「石田三成邪謀を以て諸將を誘ふ。然れども郡国の將士皆願心一志、内府に歸嚮す。三成恃む所の岐阜城は既に陥ち、群兇大垣に屯聚す。今被輩を誅戮せんが為に内府及び吾数万の兵を率ゐるに並進す。三成を斬獲すること指日にして定むべし。子三成の誘ふ所と為り纒かに孤城を保つのみ。一戦し志を得、兇徒悉く平せば則ち大藩上杉・佐竹の如きも亦敗亡するは近きに在り。況んや子の如きをや。宜しく亟やかに図を改め以て邦域を保つべし」と。昌幸対へて曰はく「今大老奉行専ら嗣君の為に事を挙ぐ。昌幸命を奉じ敢へて大軍に抗し危変に臨む。節の固きは其志に非ず。儻し盛んなる怒りに触れなば則ち請ふ、先づ昌幸を誅し以て戒行を啓け」と。世子再び使を遣はし招諭すれども昌幸終に従はず。故に世子議を定め上田城を攻む。大全 本多正

信城を攻むるを欲せず、世子に徑ただちに美濃に赴くを勸む 合戦誌曰、戸田一西以為不可固請攻城。

正信不聽。拋大全、一西父子從神祖戰于關原。見下文、故不取 是日我軍民舎に寄宿す。榊原康政、

世子に言ひて曰はく、「諸軍長途を經へ皆疲る。昌幸軍旅に長ず。夜に乗じ來襲せば則ち恐らくは敗を取らん。宜しく諸軍をして戒嚴せしむべし」と。世子之を然りとし乃ち軍中に陣を張るを命ず。屯火を然もやし戍卒を置く。其の夜眞田信仍果たして兵を率ゐ城を出で我軍の整肅なるを見、終に撃つ能はず引き去る。 松榮紀事信仍

作昌幸、以為世子發小諸時事。今從大全

六日、早速世子小諸を發し染屋に至り、敵城を按視す。昌幸四五十騎を率ゐ出で

我が軍を偵うかがふ。世子之を撃つを命ず。依田肥前守信守 大全作信政。今從雜錄肥前守所自記 歩

卒五十人を率ゐ鳥銃を連發す。昌幸戦はずして去る。予め信仍と謀り神奈川上流を塞ぎ水勢を減ず。兵を門側の林中と虚空蔵山とに伏せ、我兵來進せば則ち佯り走げ以て我を誘ふを約す。牧野康成の子新二郎忠成 襲稱右馬允後更駿河守 年少氣銳、

麾を乗り衆を励まし麾下の士と並進し城を攻む。大全無新二郎事今拠合戦誌 伏兵我兵の寡

少なるを見、誘はんと欲し、後軍に至り急ぎ起ち接戦す。麾下の士戸田半平・辻

太郎助・斎藤久右衛門信吉・御子神典膳 大全曰、典膳旧事里見氏長於一刀流劔術。台廟聞其名召仕

麾下学撃劔、寵遇之余賜諱字名曰、忠明。後更称小野二郎右衛門 ・朝倉藤十郎宣政 後称筑後守、為駿河大

納言忠長卿重臣 ・中山照守・鎮目一左衛門惟明槍を揮ひ力戦す。世に之上田七本槍と

謂ふ。大田吉正射を善くし数人を射斃し以て士気を鼓す。大全無斎藤又右衛門而有大田善大

夫。徳川記・合戦誌無一左衛門而有久右衛門。云、一左衛門後來突戦故不入七人之戦。餘史有一左衛門而無久右衛門。

云、久右衛門相繼而來亦有戦功。松栄記事併吉政為八人。然失七本槍之義、勇士一言集無久右衛門・藤十郎而有山田

十太夫与善太夫為七人。蓋吉政以善射佐槍勢故入其数。諸書各有異同。今拠家忠日記定之 康成の兵先を争ひ

進み闘ふ。大久保忠鄰・酒井家次・本多忠政等先鋒、神奈川を渡り之を横撃す。

城兵故に敗走す。忠鄰・家次の兵追撃し城に迫る。信仍、神奈川上流を決し開門

して出で縦横に突戦す。虚空蔵山の伏兵猝かに起ち横撃す。大全載一説曰、虚空蔵山之代（伏）

兵昌幸自將 我軍大敗し死傷算ふる無し。後軍之を救はんと欲するも河水暴漲し渡る

を得ず、逡巡の間に信仍兵を収め城に入る。菅沼七郎忠政 奥平信昌第三子養於菅沼小大膳

正家。後復本宗賜松平氏。見七年 搦手に向ふ。其兵朝日千助 後称丹波 奥平左衛門等先登し外

郭を攻め破る。世子軍を斂あつむるを下令す。合戦誌係七日。曰、我軍前鋒少壯之士出刈禾稼（作物）

布漚（外からつつむ）田野。城兵出撃之。我軍敗走。忠鄰・貞成之兵還鬪。麾下士七人接槍力戦、鼓（敵）不能支入

城鬪門。餘史無日亦近此説。今從大全 本多正信大いに怒り以て鬪士皆軍令を犯すと為す。世

子に言ひ法に処す。大久保忠鄰をして其旗奉行杉浦總左衛門久勝を殺さしむ。

七日、久勝自殺し忠鄰免るるを得。合戦誌係九日曰、旗奉行杉浦平大夫。拋大全、平大夫久成久勝長

子。今訂之 牧野康成の旗奉行贄掃部も亦死に処せられ忠成と掃部と出奔し亦免るる

を得。是に由り忠鄰と正信と協せず。康成及び戸田半平以て大田吉政に至る。八

人たく謫せられ（位を落とされ地方へ行かされること）吾妻砦を成り後皆召還せらる。大全無正信事。

餘史曰、世子大怒正言（信）救之。按ずるに、正信、忠鄰と相軋（きし）る、事十八年に見ゆ。蓋し其原此に起く。

今合戦誌・松栄記事に従ふ。世子、又上田城を攻めんと欲す。其の関原戦の期に後るるを恐れ、正信及び榊原康政と議り森忠政・仙石秀久・石川康長・日根野高吉・諏訪頼水をして上田城に備へしむ。

十日、世子、兵を引き和田嶺を越ゆ。康政前鋒を為し本多康重(殿)股を為す。合戦誌正信

畏昌幸隔其後不敢由大路歴間道。至長峯邑路甚險惡。士卒替(皆)苦、独康政大言曰、敵若出躡(じょう)則以我一

軍撃破之、何難之有。竟由大路而遇。昌幸不敢出兵。大全駁其説曰、諸書或云、世子遇間道。非也。既以森忠政等備

上田城。有何戒懼而枉取間道哉。按ずるに、康政魁を為し康重殿を為す。康政辟(群)を離れ独行すべからず。今大

全に従ふ。初め大友左兵衛督義統。称總五郎、左京大夫義鎮入道宗麟子、叙従四位下任侍従少将、世称豊後

少将。朝鮮の師に左たがひ律を失ふ。豊臣秀吉、封を奪ひ安芸に流す。毛利輝元をして之

を幽し其子義延を江戸に配せしむ。神祖之をあわ矜れみ采邑宅地を賜ふ。松栄記事曰、義統

流于常陸依佐竹義宣。誤矣。今従大全・餘史。而賜采邑宅地、抛紀事、義延、紀事作義乘。抛大友家譜初名能乗、後

更義延。義能国音相同。今従大全・家譜。石田三成輝元と議り義統をして拳兵せしめて曰はく

「事成らば則ち旧封を復す」と。義統喜び豊後に還り士卒を召集す。旧臣吉弘嘉

兵衛統幸

大全曰、統幸、大友重臣吉弘鎮信之長子。義統奪封寓于中津。立花宗茂、統幸之従父弟也。故迎至柳川

給二千石。聞三成拳兵去抵大阪謁義統曰、有何所所（衍）見、軽従輝元卿之命乎。義統曰、嗣君幼弱不忍背之。且近

在配所頗被輝元之眷遇。故与其謀。統幸諫曰、秀吉公濫奪封国終不復兵。故有何思（恩）義可報嗣君。輝元卿之眷遇

誠所不忘。然内府遇郎君亦頗懇篤。而今大老奉行之拳事非專為嗣君者。且内府老謀、智勇世無其比及戰得勝如指掌矣。

願改圖以為長久之計。義統不聽。統幸曰、然則臣往関東給事郎君、以凶興復。然又不忍棄。義統竟従。義統帰筑紫。

田原近江守親賢入道紹忍

大全作遠江守鎮次。按ずるに、鎮次宗像掃部の名なり。今大友家譜に従ふ。

宗像掃部鎮次等来。従兵四千五百人に幾し。合戦誌作二千一百余人、餘史六千。今從大全 細川

忠興の重臣松井佐渡康之・有吉四郎右衛門立行

先臣城所友仙曰、佐渡名興長、四郎右衛門名興

吉。今從細川家傳録

木築城を留守す。義統の拳兵を聞き予め守備の計を為す。黒田如水

専ら鎮西兇徒を計るを以て任と為す。士衆を簡閲（点検する）し九千四百余人を得、

中津城を出で大丸原に屯す。豊後高田城主竹中重信に勧め帰正せしむ。重信病と

称し其子采女正重次をして従軍せしむ。采女正名拋大全 是に先んじ、如水使を広島に

遣はし義統を禍福を以て諭す。義統、依違とし(ぐずぐずする)之に答ふ。如水先づ垣

見家純を富来城に討たんと欲し赤根嶺に進陣す。松井康之・有吉立行急歩を差し(指

示する)義統の来侵を告ぐ。如水、井上九郎右衛門・野村一右衛門等をして兵三千を

率ゐしめ之を援く。田原紹忍建議し州の立石を以て営と為す。立石、石垣原の西

南に在り。山嶽秀峙、地勢険固にして義統祖先創基の地なり。故に紹忍之を勧む。

其夜義統立石に屯し宗像鎮次・都甲兵部等をして木築城を攻めしめ、外郭を破る。

如水の援軍を遣はすを聞き、兵を引き還る。中津の援軍木築城下に至る。敵兵既

に退く。故に立石に進攻す。康之・立行、兵三百を率ゐ之に従ふ。義統十余人と

立石を守る。吉弘統幸・宗像鎮次・都甲兵部等三千五百人をして石垣原に陣せし

め以て之を拒ぐ。立石を距つること二十町ばかり。如水の先鋒時枝平大夫・母里

與三兵衛、二軍の又野治左衛門徳川記作久四兵衛。今従大全・合戦誌・餘史。蓋更称也。・曾我部

五右衛門・池田九郎兵衛・黒田安大夫等一千五百人進み之と戦ふ。敵兵佯り走る。平大夫・与三兵衛北にぐるを逐ふ。敵河水に阻まれ還り闘ふ。統幸兵を督し前に来。其鋒甚だ鋭し。平大夫・与三兵衛退き走る。戦死する者八十人。敵を斬ること僅か十二人。久野治左衛門時に年十九。槍を揮ひ敵三人を殺して戦死す。曾我部五右衛門、敵将鎮次と相搏ち交刃して死す。康之・立行、實相寺山の南に陣す。如水の先鋒戦ひ敗るるを見、兵を引き直ちに進む。九郎兵衛・安大夫、合隊し一と為る。都甲兵部の兵と闘ふ。勇を奪(奪)ひ馳突し、敵将兵部を斬る。康之・立行力戦し十九級を獲る。扱細川家傳録 吉弘統幸、如水の先鋒を破り兵勢大いに振ふ。暫し士馬を休む。義統使を馳せ退軍せしむ。統幸対へて曰はく、「不可なり。敵をして勢に乗り来迫せしむ。臣今之を破らん」と。義統、鋭兵四五百人を遣はし之を援く。如水の第一軍井上九郎右衛門・野村一右衛門・後藤太郎助、石垣原北山上に陣し兵を引き下る。鎮次・兵部の残兵及び義統の援兵合せ一隊と為り之を拒ぐ。我

兵力戦し級を獲る。敵軍の先鋒敗走す。統幸後軍を率ゐ逆戦す。勢甚だ猛厲なり。九郎右衛門の兵少し却く。左軍野村一右衛門年十九、朝鮮の役に夙つとに勇名を著す。衝突し前無し（立ちふさがる者が無い）。後藤太郎助相継ぎて進む。敵陣頗る擾ぐ。統幸下馬し槍を揮ふ。我兵を殺すこと二十人ばかり。自ら其名を呼び九郎右衛門と闘ふ。九郎右衛門十字槍を以て接戦し其脇を傷つく。統幸戦ひ疲れ重創し兵を扶けて退く。太郎助の兵、小栗次右衛門追撃し其首を獲る。統幸は驍将なり。敵兵気を奪はれ敗走す。九郎右衛門・一右衛門・太郎助三隊合撃し獲級多し。兵を引き還る。凡そ四百六十八級を獲る。我兵の死者一百四十余人。如水進み實相寺山に陣し首級を檢し之を別府邑に梟す。義統兵を見るに猶ほ一千四五百人有り。田原紹忍、義統に立石の險に抛り之を拒ぐを勸む。義統の驍兵戦死し殆んど尽く。氣懾おそれ復び戦ふ能はず。使を如水の陣に遣はし降を乞ふ。如水之を許す。紹忍、岡城に帰り中川修理大夫秀成に依る。瀬兵衛清秀子。右衛門大夫秀政弟 義統剃髪出降す。如水

之を幽して歸る。家忠日記・徳川記・細川家傳録・大全・合戦誌・餘史・松榮紀事 大全、宮越秀興曰一説、

加藤清正銃手隊長太田玄蕃・井上大九郎、率兵至石垣原、声言援如水而実欲觀其勝敗以附勝者。如水察之不見二人。

使之還能本。今按ずるに、清正、如水と合謀す。専ら神祖の為に出力征討す。懷貳の説、信ずるに足らざるなり。又

按ずるに、中川秀成も亦援を為す。如水岡城を出で石垣原の側近き高崎山に陣す。今按ずるに、秀成始め秀家・輝元

に党す。如水・清正と協せず。事状清正の如水に寄する書に見えて云はく、如水を援けんが為に出兵すと。其説信じ

難し。豈に秀成或は両端を持し成敗邦を觀望するか。未詳。附以備考。又拠大全、十日義統泊豊後浜脅浦招集旧臣。

十一日遣兵攻木築城。十二日吉弘・嘉兵衛・宗像掃部等出屯石垣原。十三日大戦于石垣原、嘉兵衛・掃部戦死。其夜

義統出降。今欲事實接続。故不係日

是日、神祖熱田駅に至り藤堂高虎来謁す。密旨を受け赤坂營に歸る。家忠日記・松榮紀

事 九鬼守隆、畔乘城に在り、数日父嘉隆と相持す。神祖の西上を聞き其の嫌疑に

触るるを恐る。

十一日、兵一千五百を將み鳥羽城を攻む。嘉隆、堀内安房守及び其第二子五郎七・

第三子五郎八をして城を守らしめ自ら兵一千三百を將み城外に出で拒戦す。守隆の先鋒敗走す。越賀隼人・青山豊前等衆を励まし還り戦ひ互に死傷有り。晩に及び父子各兵を引き還る。守隆使を関東に遣はし捷を告ぐ。神祖道に在り之を聞く。

甚だしくは其功を嘉せず。合戦誌・餘史並曰、神祖至中泉、守隆使来二首級。神祖嘉征伐之勝兆褒守隆之功。按ずるに、父子相攻む、固（もと）より美事に非ず。神祖之を褒むべからず。今大全に従ふ。家忠日記曰、桑

名城主氏家内膳正、援九鬼大隅守攻畔乘城、長門守拒戦大破之。上首級于関東。与諸書異附以備考

是日、神祖清洲に至り疾有り。

十二日、清洲に留む。猶ほ佳からずと称し、以て世子東山道より来会するを待つ。

松栄紀事 井伊直政を赤阪営に召し清洲に至らせ前鋒の諸將の戦功を勞ふ。直政及び

本多忠勝の謀略能く機宜ぎに適かなふを称む。大全 松栄紀事曰、是日、藤堂高虎又来謁曰、請、北渡河

至岐阜。以休士馬。神祖不聴。家忠日記・大全並無其事。附以備考

是夜、市橋長勝大垣城下馬瀬営を襲ひ戍兵十余級を斬り福島正則の営に送る。家忠

日記・松栄紀事 大谷吉隆郡県を劫略し威北国に震ふ。石田三成・小西行長・島津惟新、

健歩を遣はし報じて曰はく「東軍岐阜を陥し赤阪虚空蔵山に屯す。宜しく急ぎ兵を引き関原に向ふべし」と。吉隆之を聞き檄を飛ばし北軍を徴集す。其子吉久・甥木下頼継・脇阪安治・其子安元・小川祐忠・戸田武蔵守重政・朽木元綱・赤座久兵衛等一万五千余騎を率ゐる。

是日、敦賀を発し関原に向かふ。慶長記作是月朔、今従家忠日記・餘史・松栄紀事 敵軍の北国大

将京極高次、雅もとより帰順を謀る。朽木元綱を給あさむき途を殊にし海津に出づ。分兵し

水陸二途と為す。自ら湖水を航し大津城に還る。立花宗茂・筑紫廣門敵軍の前鋒

として大垣に赴き粟津やどに次る。高次、将佐を召し之を夜襲せんと欲す。黒田伊豫

諫めて曰はく「宗茂は良将なり。輕拳すべからず。城中を計り兵を見るに三千余

人有り。敵城下を致し(去る)以て之を破るに如かず」と。議未だ決せず。宗茂・廣

門既に粟津を発す。時の人、頗る伊豫の失機を譏そしる。大全 高次、多賀孫左衛門等を

遣はし関寺の大門を闔とぢ以て往来を遏とどむ。芻糧を城中に運び大津松本関寺の市廩てん

を焼き以て戦場を闔ひらく。分兵し衝衝ふうとん（裏通り）に拠守す。宗茂・廣門、高次城守する

を聞き還軍し勢田に屯す。以て勢田橋を保ち急を大阪に告ぐ。毛利輝元・増田長

盛、毛利七郎兵衛元康を以て將と為し元康、元就第六子後称大藏少輔毛利秀包・多賀出雲

守・杉若越後守德川記作杉谷越中守。今訂之・垣屋隱岐守・荒木平大夫重堅等三万七千

余兵を率ゐる。宗茂を以て前鋒と為し城を攻む。大全・合戦誌・餘史・松栄紀事関寺の門

闔ぢ兵過ぐるを得ず。時に、大虞院、尼孝藏主秀吉公侍女、慧而有才。秀吉公使傳命于中外。

頗有勢・阿茶局を以て使と為し高次夫人を諭すに、高次をして大阪に帰らしめんと。

司門二女を過ぐす為に開門す。元康の兵之に乗じ入る。城兵之を拒がんと欲す。

立花宗茂、兵を膳所高木に進む。城兵後を邀うたるを恐れ第三城に引き入り門を

闔とづ。是に先んじ、高次、重臣山田大炊を関東に遣はし以て質と為す。大炊後更称多

賀越中神祖之を嘉して曰はく、「高次、誠款（真心）余り有り。何ぞ質を用ゐな為さん」

と。乃ち良刀を大炊に賜ひ以て之を還す。高次の城守益堅ますますし。二女其志を奪ふ能はず竟に大阪に還る。九日より十一日に至り敵兵昼夜城を攻め城兵悉力拒守す。伊賀の謀者、夜元康の営に入り旗一流を奪ひて歸る。

是日、城兵建立し以て嘲ふ。立花宗茂の兵之を見、以て元康先登すと為し急進攻城す。筑紫廣門・多賀出雲守等相繼して進む。城兵矢石を發し之を捍ふせぐ。敵兵衆多く死傷を顧みず蟻附攻城し京町口を破る。三面に斉進し多賀出雲守先登す。立花宗茂の隊將立花吉右衛門成家力戦し創せらる。部兵皆殊死闘ふ。竟に第三城を陷す。山田大炊・赤尾伊豆等尾花川口を守り奮戦し之を拒ぐと雖へども敵兵麁きん集し度守るべからず。第二城に退き入る。高次使を馳せ之を督責す。大炊・伊豆開門して出で槍を揮ひ突戦し敵数人を殺す。大炊の兄三左衛門戦死し大炊・伊豆遁進し（かわるがわる進む）敵を却くこと凡そ六たび、戦ひ疲れ第二城に入り門を闔くわづ。敵兵竟に第三城を陷し進み第二城に薄せまる。城兵銃矢を發し巨石を飛ばし之を拒ぐ。

敵將松浦伊豫守鉛に中り死す。大全本書曰、石川掃部頭亦中鉛死。按ずるに、石川掃部頭頼明乱平し自

殺す。事下文に見ゆ。十月家忠日記唯だ伊豫守一人戦死を書くのみにして掃部頭無し。今之に従ふ 其余の死傷

五六百人。敵第三城に退き至り陣を張る。

十三日、敵兵大小の銃を連発し之を攻む。堞墨悉く壊す。高次善く士卒を撫す。

故に城甚だ危しと雖へども敢へて離叛する者無し。輝元・長盛、東軍と会戦する

こと近きに在るを以て僧興山・新莊直頼をして高次に修和好説せしめて曰はく「大

老奉行嗣君の為に兵革を興す。而るに明公独り城守す。罪謀叛に等し。宜しく講

和し以て家人の命を全うすべし」と。高次曰はく「我内府に属し諸將輝元に属す。

互に雌雄を争ひ各其志を行ふ。嗣君に関するの事に非ず。内府天下の元老たり。

義は当に之に服従すべし。今危きに臨み城を授くるは武夫もののふの為す所に非ざるなり」

と。興山・直頼固く之を勧む。高次死を以て自ら誓ふ。

是の曉、敵山上園城寺より仏郎機ぶらんぎ（明代中国での欧式大砲の称）を発し殿守第二層の柱を撃

破す。松丸夫人の侍女二人<sup>き</sup>倅死す。松丸夫人高次之妹、武田孫八郎元明之妻。秀吉公聞其美誘殺元明

奪之為妾。在伏見城松丸。故世称松丸殿 夫人大いに驚き頻りに高次に和親を勧む。黒田伊豫

も亦之を勧む。高次已むを得ず之に従ひ城を立花宗茂に授けて去る。餘史曰、大谷吉隆

与宇喜多秀家議、使朽木元綱説高次降之。按ずるに、吉隆・秀家未だ嘗て大津を攻めず。餘史誤れり。今大全に従ふ。

又按ずるに、大全宗茂の立花吉右衛門城（成）家を褒むる書を我（載せ）親成と書く。之を立花飛驒守清直の土安東

守経に質す。報（かえ）して曰はく、「宗茂数更名す。此時親成と名のる。然れば宗茂を以て定名たると繆（あやま）

る」と。抛家忠日記・大全・合戦誌・餘史。九月朔、吉隆発敦賀。三日夜高次帰大津城。四日夜宗茂・廣門屯勢多。

七日大坂諸将来会自十一日攻城。今欲其事通貫故不係日 初め因幡鳥取城主宮部兵部少輔、神祖の

東征に従ふ。諸將と西上するに及び、書を桑名城主氏家行廣に馳せ、神祖に叛し

城に入り同守するを告ぐ。夜岡崎駅を出で將に水路を取り桑名に赴かんとし、路

に京極高次の使石川太郎左衛門に逢ふ。兵部少輔左右に命じ輒ち之を殺す。太郎

左衛門杖<sup>（杖）</sup>する所の竹杖を剖<sup>わ</sup>り之を視るに、一行書有り。台駕し亟やかに西上する

を促す。兵部少輔以為へらく、行廣、高次の妹夫なり。其心保ち難しと。猶予し進退を議る。計出づる所無し。天既に明け宰臣相議る。使を井伊直政・本多忠勝の旨に遣はして曰はく、「兵部少輔病狂濫出す。処分を請ふ」と。直政・忠勝、宰臣に命じ其兵衆をして本軍に隸せしむ。合戦誌、兵部作宮内曰、宮内少輔。雖從東征而春恋妻子。

石田三成、以書誘之。宮内少輔棄軍潛出營將赴大阪。其臣告之田中吉政。吉政遣人進及於塗送吉田城、使松平家乗拘之。軍無主將士卒惶惑。藤堂高虎善祥坊之女壻也。故宮内少輔の臣反（友）田左近右衛門請拳軍屬高虎。高虎告狀於神祖。神祖使高虎撫其軍。士卒始安。按ずるに、兵部少輔諸將と西上す。此時神祖猶ほ江戸に在り。軍機疾速、往復に日を経るを容さず。今大全に従ふ

是日、神祖岐阜に至る。厚見郡西座村立政寺の僧大全曰、諸書作安八郡瑞雲寺。非也。龜甲

山立政寺為是。今從之。厚見安八二郡皆在美濃せきだい碩大の柿かき子を盤に盛り之を献ず。神祖近習をし

て随意に之を取らしむ。戯れに曰はく、「大柿吾掌握に入れり」と。合戦誌・餘史。大柿

大垣国音相通。大全曰、自是改大垣書大柿。今按ずるに、旧に依り皆大垣と書く

十四日、神祖岐阜を発す。諸將呂久河上に奉迎し晋<sup>す</sup>み謁す。神祖其戦功を面勞す。

家忠日記・大全・合戦誌・餘史○慶長一統記・松栄紀事並曰、是時神祖握福島正則之子。顧諸將曰、須明日塵戦（おうせん）殄滅（てんめつ）殲滅（せんめつ）賊徒。諸將皆嘉。按ずるに、神祖敵に因り転化し必ずしも戦期を指定せず。蓋し後

人会戦適十五日に在るを見、傳会し此説を為すなり。今取らず 水野勝成を召し曾根の旧壘を守らしむること故<sup>もと</sup>の如し。勝成辞して曰はく「臣、願はくは赤阪諸將と前鋒に在り戦陣に效力せん」と。神祖許さずして曰はく「曾根は要害の地。敵若し楽田・大垣の間に出兵し岐阜・赤阪の路に邀<sup>ま</sup>たば則ち諸將赤阪に屯するを得ず。汝、目前の功を貪りて国家の大計を忽<sup>ゆるがせ</sup>にする勿かれ」と。勝成命を奉じ退く。大全・合戦誌 亭午、

神祖赤阪に至り岡山に屯す。合戦誌曰、神祖改岡山曰勝山。徳川記亦書勝山。然大全、無具（其）事。故

依旧書岡山。是に先んじ稲葉貞通、其子通孝を以て使と為し報して曰はく「石田三成

の臣榎原平助 大全曰、彦右衛門子。時年十三、善使彦右衛門攻部曲佐之也 多兵を率ゐ摩免戸渡を扼

す。宜しく之に備ふべし」と。時に神祖岡崎城<sup>とま</sup>に次る。通孝状を告げ神祖之を嘉

す。是に至り貞通及び其子典通・加藤左衛門佐・関一政・竹中重門等犬山の降将  
来謁す。馬場昌次・山村甚兵衛・千村平右衛門も亦同時に謁見す。神祖皆善く之  
を遇す。大全 大垣の斥候大旆の至るを見、走り之を告ぐ。宇喜多秀家・石田三成兵  
を率ゐ池尻口に出で之を按視す。侯騎告げて曰はく、「東兵盛を増し白旗翩翩へんぽんとす。

内府来到するは必なり」と。島清興曰はく、「比日敵兵夜出でこのころ尽く其営に還る。詐

り大軍増益すと為し以て我をあざむ給く。白旗金森法印なり、其動揺に乘じ一戦し之を  
破るべきなり」と。合戦誌載島左近之語曰、内府方在奥州与景勝对阵。安得来此。此妄言也。按ずるに、大

垣の敵将豈に神祖西上を知らざるの理有らんや。今取らず。合戦誌又云、大垣城兵聞神祖在岡山皆失色。左近謂三成  
曰、今不一戦制勝、則士氣不振。請、撃之。三成然之。左近為前鋒蒲生備中為後拒隔株川陣于笠縫。秀家陣于池尻

口。今従大全、蓋島清興亦在三成前鋒也 秀家曰はく、「然らば他軍を催督するに及ばず。我、  
治部少輔と手下の兵を以て之を撃走せん」と。三成之に従ふ。二軍前鋒株川を渡  
り中村一學の陣を撃つ。一學猶幼、彦左衛門一栄代統其衆。見上文 秀家兵を一色村に伏せ以て

之を誘ふ。家忠日記・徳川記・合戦誌並云、島左近伏兵林藪、使歩卒放銃（銃）誘之。今従大全一學の叔

父一栄及び其の宰横田京治（宗カ）、兵を麾きし進み戦ふ。有馬豊氏其側に陣し兵を進め之

を援く。中島次郎大夫・稻次右近等衆に先んじ争進し三成の陣を横撃す。敵將敗

走す。一學・豊氏の兵左右に分かれ之を追撃す。神祖岡山に在り。之を望見し左

右に謂ひて曰はく「中村式部少輔わか少きより軍旅に習ひ部兵皆善く戦ふ。陣列観る

べし」と。既にして一學の兵株川を渡る。神祖艷然ふっぜん（怒るさま）として曰はく「此れ

敵誘ひ、我深く入りて其計に墮す。今立たちこるに敗せり」と。追騎勢に乗り長駆し伏

発するに遇ふ。敗兵期に応じ還り戦ふ。一學の兵、敵を左右に受け支ふる能はず。

隊將野一色頼母、勅衆馳突す。秀家の兵淺香左馬、之を撃ち其首を獲る。徳川記・合

戦誌左馬作三左衛門。蓋初称也。今従大全・餘史甘利備前、秀家の銃手隊長飯尾太郎左衛門と馬

上に相搏ちて死す。其余の知名の士多く戦死す。合戦誌曰、戦死三十六人敗兵、笠縫堤

下に退き至る。豊氏の兵、三成を追撃し前鋒亦株川を渡り、岸に沿ひて退く。稻

次右近しんがり殿を為す。敵兵四騎出で之を躡おふ。其一横山監物蒲生備中之兵 右近の冑を射

中あつ。甲堅く徹らず。監物又矢を注ぐ。右近急ぎ進み之と相搏つ。監物臂力りよりよく有り。

右近幾んど危し。其奴来救し竟に監物を斬る。奴をして其首を取らしめ三騎を撃

ち之を却く。徳川記・餘史、右近作半兵衛。疑初称也。今從大全・合戦誌、先臣佐宗淳曰、後称吉岐。徳川記・

合戦誌・餘史並云、右近斬監物。与花木外記接槍外記逃去。蓋大全所載三騎之一也 有馬法印神祖の側に侍さむらひ

ふ。神祖右近の背旗を望見し其姓名を問ふ。対へて曰はく「玄蕃頭の兵稻次右近」

と。神祖之を召し面し其功を褒む。一學の兵猶ほ堤下に在り。引き去る能はず。

神祖、本多忠勝を召し退兵せしむ。家忠日記・松栄紀事並曰、命本多忠勝・井伊直政二人。抛本多家

譜忠勝一人為是。今從徳川記・大全・合戦誌・慶長一統記 忠勝輒ち歩騎を率ゐ兩陣の間に馳せ至る。

左右指揮し自ら殿を為し軍を全うして還る。家忠日記・徳川記・大全・合戦誌・餘史・松栄紀事 秀

家・三成兵を引き還る。牛屋村に至り遮那院の門前に獲る所の東兵の首級凡そ八

十四を槍にす。大全本書拳一説曰、敵獲東兵首三十二。我軍斬敵首十七。戦云、中村一學之兵死者三百余人。

未知孰是 三成、秀頼の近臣廣瀬兵庫に謂ひて曰はく、「子の郷里美濃北山に高橋修理有り。廣瀬谷に居す。世豪族たり。子往き之を説け。之をして邑民獵者を驅率し銃手一千人を為らしめよ。以て関原の戦期に会せん。戦勝せば則ち美濃半州を封じ、以て其の功に酬いん」と。乃ち黄金一百枚を授け之に資す。兵庫、廣瀬谷に至り其の言を告ぐ。修理曰はく、「吾祖先、將軍尊氏公の時より、此に居し栄達を願はず。故に秀吉公、之を召すも出でず。今何の故有りて出でんや」と。兵庫曰はく、「此の如くんば則ち戦勝の後、罪を声し討を致し宗党必ず滅せん。子悔いる勿れ」と。修理曰はく、「此れ冤枉（無実の罪）なり。吾干戈を以て人に抗せず。何の怨讐有りて処罪するや。当に天下の治平を俟つべし。主将に訴へ永に郷里を保つを被らん。子休めよ」と。遂に黄金を却し受けず。兵庫屈する能はずして歸る。大

全・餘史

臣按ずるに、高橋修理高尚の士にして先見の明有り。石田三成の将に敗せんと

するを知り毅然と之を拒む。辞直氣壯、悪にくまずして厳し。卒に干禍を免れ以て其の宗党を保全す。之を古人に較くらぶるに殆んど媿づること無し。特ただ怪しむ、夫れ天下既に平し終に見る所無きを。豈に其事神祖の間に達せざるか。或は記す者頗る其美に溢るるも其实未だ至らざること是の如きや。人をして矜然と疑ひ無き能はざらしむなり。

是に先んじ、豊臣秀秋、高宮に至り逗留し進まず。宇喜多秀家使を遣はし之を促す。之をして兵を引き美濃を出で以て会戦に期せしむ。秀秋病と称し出でず。既にして秀家、大垣城に入り其の異志有るを度はかる。石田三成と議り戸田重政・平塚為廣に謂ひて曰はく、「卿等須らく秀秋の營に至り言を軍議(託)に記し之を執へ以て質と為すべし。如もし命に従はずは則ち之を刺殺せよ。卿等兵死せば則ち功、事に死すると等し」と。重政・為廣諾す。輒ち高宮の營に至り謁を請ふ。秀秋、疾劇すと称し出でず。二人の計施す所無くして帰る。日を歴へ、秀秋大垣に至る。使を城

中に遣はして曰はく、「下官疾有り。故に流言<sup>しんご</sup>荐<sup>せん</sup>に興る。今此に来たり城外に屯す。須らく東軍と決戦し然る後に諸將に入り見え<sup>まみ</sup>以て其の無貳を明らかにすべし」と。秀家之をして大垣城の西松尾山の麓に陣せしむ。秀秋八千余兵を引き山上に陣す。是夜、大谷吉隆其營に至り秀秋を讓<sup>せ</sup>めて曰はく、「卿の兄弟多しと雖へども太閤深く卿を愛し、以て隆景卿の養子と為す。嗣君を輔佐する、卿に非ずして誰あらん。聞くが如く卿疾に託し逗撓<sup>とつご</sup>（ひるみ進まない）し関東に通謀すと。豈に宗室の胄として望む所ならんや。秀家卿及び三成・正家皆卿を殺し以て携貳の徒を懲<sup>こら</sup>さんと欲す。然れども其明驗無きを以ての故に隱忍し此に至る。宜しく蚤<sup>つと</sup>に凶<sup>と</sup>を改め以て臣節を全うすべし」と。稲葉正成・平岡頼勝、秀秋の側に在り。同辞<sup>しか</sup>に対へて曰はく「中納言幼きより太閤の深恩を被り之を嗣君に報いんと欲す。而るに近く罪疾<sup>（罹）</sup>を以て輒ち無根の言来たり。豈に異図を蓄へんや。請ふ、怪しむ勿れ」と。吉隆曰はく「黄門（中納言秀秋）年少なり。恐らくは其の志慮未だ定まらず。或は姦人の誘ふ

所と為る。今二人の言を聞くに担<sup>(目)</sup>然意<sup>と</sup>積けたり」と。遂に辞去す。合戦誌・餘史並曰、

言陸（吉隆）謂三成曰、金吾中納言及（反）覆難信、吾欲抵彼嘗面質之。実懷携貳則吾交刃而死。足除一害。然吾病喪明。拳指不便。当以平塚因幡守為介。因幡守喜応之。二人往秀秋嘗謁之。秀秋出見。吉隆進捉秀秋以短刀擬其胷。

因幡守同進。吉隆責其有異圖。秀秋不少泪自若晒曰、無之。如其有貳、何輒出見。意者内府縦及間欲使殺吾乎。果爾疾斬吾首、以降内府。三人信之。復坐曰、然則賜誓書以安大垣之人心。秀秋以為、要盟（無理強いの誓い）鬼神不享。

即披誓書因幡守監之。吉隆、使因幡守齊之歸大垣徑赴関原。蓋二書務欲張皇（広げる）吉隆之謀略。而傳會為此說。

家忠日記及大全所載較平実。今從之。大全載一説曰、秀秋將攻安濃津城。至関地戰（地蔵）。称疾。還至高宮。移屯柏

原逗擣數日。秀家・三成・吉隆相議。吉隆至佐和山城招秀秋將執之。秀秋覺之不来。故吉隆遣重政・為廣於其嘗云々。

然二人出大垣城、赴秀秋之嘗。旧説所伝。故不取一説。附以備考。三成、秀家と謀り滝川豊前守正弘・

矢田半左衛門をして秀家・三成・小西行長・長束正家・安国寺恵瓊等の連名誓書

を齊<sup>そろ</sup>へ松尾山へ抵<sup>いた</sup>らしむ。正成・頼勝を説きて曰はく、「嗣君十五歳に至るまで秀

秋をして天下の政事を掌<sup>つかさど</sup>らしむ。合戦誌・餘史・松栄紀事並云、当以秀秋為関白。按ずるに、此れ利

を昭はすの虚辞と雖へども秀秋豈に肯（がえん）じ之を信ぜんや。今大全に従ふ 筑後・筑前二国は旧に依り、播磨を増封す。正成・頼勝は各黄金三百枚を給ふ。関原戦に勝たば近江の地を割り各十万石を封ぜん」と。秀秋使者に對へて曰はく「吾携貳無し。重く賂ふまいなは何為ぞ」と。使者帰り報ず。三成終に之を如何いかんともする無し。大全・合戦誌・餘史・松

栄紀事 敵將脇阪安治・朽木元綱・小川祐忠皆通謀歸順す。松栄紀事。按ずるに、安治の納款既

に上文に見ゆ。是に至り其の言を踐むなり。合戦誌曰、島津義弘説三成曰、敵軍以内府至岡山倍氣。我軍失勢。秀

秋携貳訛言紛紜（うん）。戦必不利。今夜襲岡山営出具不意則秀秋反計亦無所施。必得大捷、請、我為前驅。三成曰、

内府雖至兵僅三四万。此不足畏也。我兵充滿山野、既逾（こえる）十万。輝元出師亦在近日。以大兵擊少衆取勝在掌握中、夜戦危道。勝敗未可料。不如白日会戦以得大捷。此万全之道也。義弘固争。三成終不聽。按ずるに、義弘嘗て

伏見城に入り同守せんと欲す。而れども歸款の志を懐く。必ずしも此の奇策を設け以て東軍を困ぜず。其の言全く宇

喜多秀家、赤阪を夜襲せんと欲するの計と相同じ。大全其説を取らず。蓋し見る所有るなり。合戦誌・餘史又曰、三

成与大垣諸將議。遣使大阪促毛利輝元出師。輝元諾。時城中流言、増田長盛潜通關東。故輝元不得輒出。按ずるに、

是月十二日、三成、長盛に書を寄す。内府未だ来たらず、輝元大阪を出づべからずの語有り。然れば則ち三成未だ嘗て之を促さざるなり。毛利家記に拠れば秀元、輝元に勧め密かに神祖に通款せしむ。故に両端を懐く。特だ城中流言のみにあらざるなり。故に今皆取らず

是日、上杉景勝の兵將に伊王野口を攻めんとし出で石山伊王野に拠る。下總守資信下野守資宗子、初称又太郎其臣薄葉備中をして之を撃破せしむ。資信其子又十郎資重と進撃し又之を破り一百七十余級を斬る。敵兵敗走す。合戦誌・餘史・伊王野系図、資信父

子名抛系図 合戦誌曰、景勝、寇関東口、唯此一戦、其後聞関原之敗、不敢出兵神祖岡山の營に在り。福島正則・池田輝政・京極高知・黒田長政以下諸將を召し攻戦の利害を問ふ。皆同辞に対へて曰はく「大旆既に至る。吾輩宜しく兵を進め大垣城を攻め下すべし」と。神祖曰はく「善し。然れども備前中納言城に在り主將を為す。石田・長束・大谷以下將士皆其指揮を受く。卿等悉力攻城すと雖へども未だ猝拔そっぱつに易からず。三成の輕佻かるはずみ卿等知る所なり。若し中納言を誘ひ郊外に出陣せば則ち一戦

にして之を禽とらふべし」と。大全○大全・合戦誌・餘史、此下有神祖移陣菩提寺山以致敵兵之謀。然是夜、

三成出陣関原不及移陣明日会戦。故不書 敵將も亦大垣城中に会戦す。宇喜多秀家諸將に謂ひ

て曰はく「内府既に赤阪に至ると聞く。意心に、攻城近きに在り。而るに今城兵

数万守備余有り。旬日を経ず、毛利元康・柳川侍従立花宗茂・久留米侍従毛利秀包・

小野木縫殿助・早川主馬首等大津田辺城を抜き此に來会す。安藝中納言も亦当に

継ぎ至るべし。十余万の衆を以て関東の疲兵を撃たば其勢鷹鷲ようせん（たか・はやぶさ）の鳥

雀を毆うつに異ならず。此れ万全の策なり」と。三成曰はく「然らず。凡そ城守は

寡を以て衆を制するに利あり。今十万の兵を擁し名は関東を征伐すと為して孤城

に坐守す。出戦する能はずは則ち士氣沮喪す。勢振ふべからず。宜しく安藝宰相毛

利秀元・長束正家をして部兵三万七千人を率ゐ前軍と為し青野原に出陣せしむべし。

明公（貴殿）大谷吉隆と四万人を率ゐ第二軍を為せ。三成、島津惟信・小西行長及び

大阪弓銃三万余人と関原菩提寺山麓を歴へ、赤阪虚空蔵山に登る。敵の後に繞めぐり出

で機を見、雷発し前後合撃せば則ち東軍走げ呂久合渡に至らん。併力追撃せば之を破ること必なり。將兵の道、要は攻むべき所を攻め守るべき所を守るに在り。願はくは明公少しも遲疑する無く速やかに馬を進むべし」と。吉隆、正家に謂ひて曰はく、「我兵十万を踰ゆと雖へども内府既に赤阪に至る。則ち彼も亦殆んど十万を將ゐ勢鈞ひとしく力敵かなふ。虚実利害を較はからずして一挙に鋒を野戦に争はんと欲するも、未だ其可なるを見ざるなり。黄門君尚ほ少壯と雖へども謀慮深遠たり。諸軍来集し計に至ると謂ふべきを待たんと欲す。而るに三成輕遽けいきよし妄りに出師を勧む。此れ敗を取るの道なり。宜しく堅疑持重し以て勝を制すべし」と。三成固く争ひ従はず。其の余の敵將も亦吉隆の謀を用いざる者多し。秀家奪ふ能はず。竟に三成の議に従ふ。吉隆又曰はく、「諸將衆と同心し隊伍を乱さず必死を決志せば則ち或は勝を取るべし。一たび前さきに却しりぞくこと有らば則ち勝敗未だ予料すべからず」と。戸田重政も亦其言に賛成す。秀家曰はく、「衆議既に定む。宜しく亟やかに歸

營し明日旦会戦すべし」と。諸將皆出づ。吉隆、秀家の命を受け松尾山豊臣秀秋の營に至り赤心無貳を以て前約を固守するを諭す。大全 秀家、三成と議り福原直孝をして大垣牙城を守らしめ、熊谷直陳・垣見家純・木村宗左衛門・其子傳藏をして第二城を守らしめ、高橋元種・秋月種長・相良長每をして第三城を守らしむ。兵合せ七千五百人。大全作七千余人。今従水野勝成事記 正家、安国寺惠瓊と南宮山の營に帰り、吉川廣家に対し秀家の命を伝へて曰はく「明日の戦安藝宰相宜しく前軍を為すべし」と。廣家既に福原越後と合謀し秀元を帰款に勧む。故に託言して曰はく「宰相、父に代り兵を將ゐる。当に秀家卿と諸將に号令すべし。而るに之をして前駆を為さしむるは殆んど失望なり」と。正家・惠瓊固く之を勧むるも廣家終に聴かず。夜二更、三成、野口村田(路)銘を歴、南宮山に至り秀元・廣家を説きて曰はく「秀家卿、秀元卿と前後を為し主將たり。何の不满有りて此の言を発する」と。論弁すること再三なれども亦奪ふ能はず。三成曰はく「然らば則ち秀家卿諸將を指揮

し戦を作し、秀元卿須らく敵陣を横撃すべし」と。言訖りおわ牧田間道を歴貝原篤信木曾

路記曰、牧田、距今洲二里。牧田東有高田村。有野曰、唐末、三成所歴間道即此也 四更、松尾山に至る。

平岡頼勝・稲葉正成に対し秀秋をして明日勦戦せしむ。大谷吉隆の藤川の營に徑至し軍事を議る。小玉大路を経、黎明小開村に至る。島津惟新・鍋島勝茂・小西行長等夜大垣城を出で野口より関原に赴く。宇喜多秀家大軍を將る諸將に後れて発す。大全・合戦誌・餘史○関原軍記曰、大垣至関原行程三里。松榮紀事曰、敵將暗夜衝雨至関原。人馬騷擾。其

勢不異于奔敗。按ずるに、翌日の戦、秀家先づ福島正則の陣を破る。軍列整はずして能く此の如からんや。蓋し後人聴き度（はか）る説なり。故に取らず 一柳直盛、長松城に在り。西尾光教、曾根城に在り。

謀奔り赴きて告ぐ。直盛・光教、使を本營に馳せ之を告ぐ。福島正則、其臣祖父

江法齋を以て使と為し拋大全、法齋初称江右衛門。武功積累召仕麾下、隸青山常陸介忠成。忠成授氏曰、

青山石見守。後有罪被誅。事在十九年 告げて曰はく、「敵兵城を出で將に天明を俟まち進み討ん

とす」と。神祖、法齋を召し面諭して曰はく、「城を出づるは勝兆なり。繼發し以

て之を殲滅すべしと告せ」と。家忠日記・合戦誌・餘史・松栄紀事 関原軍記・慶元記並曰、神祖令諸

将曰、敵兵皆依山而陣。但撃向我者、勿撃山上敵。直由海道西上。則戦勝必矣。敵若下山横截我軍。則可撃破之此又

取勝之道也。附以備考 法齋神祖に白して曰はく、「鍋島信濃守、未だ戦はずして兵を引き

山に上る」と。神祖曰はく、「天未だ明けず。且重霧(深い霧)昏濛(こんもつ)、汝何を

以て之を知る」と。法齋曰はく、「臣、鍋島陣する所の馬糞を攪とり之を試みるに猶

ほ暖かなり。是以て之を知る」と。神祖曰はく、「前日吾岐阜に到る。勝茂通款し

降を請ふ。其れ此の如かるべし」と。大全 時に北面の土某、京極高次を唁とむふ(みま

う) 為に大津に往く。山科を過ぐる比ころ三成の急歩に遇ふ。之を捕へ本営に送る。三

成の増田長盛に寄する書を齎もたらす(そろえてさし出す)。大垣の形勢を詳説す。神祖、発に

臨み之を覧じ諸将をして之を伝へ觀しむ。大全・慶元記・餘史。書辞載在三書。今略之 予め監

使を召し号令を下す。福島正則・細川忠興・其子忠隆・織田有楽・其子長孝・田

中吉政・其子長頭・加藤嘉明・藤堂高虎・黒田長政・生駒一正・戸川達安・竹中

重門及び公子下野守忠吉、井伊直政・本多忠勝、前軍を為す。筒井定次・稲葉貞通・其子典通・加藤左衛門佐・蜂須賀至鎮・遠藤慶隆・小出秀家・亀井茲矩・寺澤廣高、二軍を為す。池田輝政・其子利隆・浅野幸長・山内一豊・有馬法印・其子豊氏・金森素玄・其子可重・徳永法印壽昌・一柳直盛・中村一栄・市橋長勝・松下吉綱・横井伊織・其子孫右衛門・作左衛門等南宮山・栗原山の敵に備ふ。西尾光教・水野勝成・津輕右京大夫為信・松平康長等、大垣の敵に備ふ。酒井家次、麾下前鋒を為し、大須賀忠政・本多成重、後拒を為し、堀尾忠氏岡山の營を守る。

総七万五千三百三十余人。合戦誌曰、分為二十六隊。堀尾忠氏与山内一豊備大垣城。其余軍列合戦誌・餘

史与此有異同。今從大全 奥平貞治を松尾山に遣はし豊臣秀秋の軍を監しむ。

十五日黎明、神祖擲甲し往年の長湫の捷を談じ近習をして之を聞かしむ。関原に出軍し野上の西桃配原に建牙す。大全・合戦誌 毛利秀元・吉川廣家、密かに款を輸うすと雖へども、神祖、未だ情実を知らず頗る其詐を疑ふ。本多忠勝曰はく、「彼若し

詐を懐いだかば則ち当に南宮山を下り陣を張るべし。而るに今に至り猶ほ山上に在り。則ち其の詐に非ざるは知るべし。且輝政・幸長、陣を牢固に置く。復び慮るべきこと無し。宜しく亟やかに大旆を進むべし」と。神祖之に従ふ。方に是時、惠瓊、秀元の營に至り説きて曰はく、「敵將関原に布陣す。内府將に焉ここに進まんとす。宜しく諸將をして烽を見作戦せしむべし」と。秀元曰はく、「吾年尚ほ少わかし。軍事悉く吉川に委ゆたぬ。彼当に機を見、兵を発すべし。更に勞心する勿かれ」と。惠瓊曰はく、「卿太閤の養子として、特ただに恩遇を蒙る。秀頼公の成敗（処遇）造次に（短い間）に忘るべからず。而して之に誘かこけ軍事悉く吉川に委ぬ、不忠孰れ甚だしき。宜しく亟やかに図とを改め以て敵軍を勦ほろすべし」と。秀元語塞つまり、必ず兵を発し後つしを襲ふを誓ふ。惠瓊喜びて帰營す。秀元使を廣家の營に遣はし謂ひて曰はく、「関西の諸將皆其質を棄て内府に帰す。吾も亦棄てんと欲す。福原左近以て其後を襲撃す。須らく戒嚴すべし」と。廣家固執し聴かず。大全 既にして麾下の候騎沢井左衛門・

森勘解由と、三成の斥候澤田小三郎・乾二郎兵衛と馬上に相遇ふ。餘史・為小西行長斥

候。今從大全・合戦誌 四人槍を提げ將に鬪はんとす。正則の候騎祖父江法齊其間に馳け

入り謂ひて曰はく「形勢を審らかにし虚実を料りはか以て主將に告ぐるが候騎の職な

り。子等鬪死せば則ち誰か主將に告ぐべき有らん。戦は事後に在り。須らく各罷

り去るべし」と。四人之を然りとし遂に東西に別れ去る。大全・合戦誌・餘史 福島正則

の前鋒、宇喜多秀家の後軍を横から截りきて隊伍を列す。秀家の兵其多少を測る能

はず。猶予し進まず。稲葉助之丞声を励まして曰はく「主君前に在り。敵其後を邀う

つ。何の疑懼有りて敢へて進まざる。須らく衝突して過ぐべし」と。馬を馳せ陣

を冒ふ(押し)のけ出る。其余槍を提げそろ齊そろひ近づく。勢甚だ猛烈なり。正則の兵加藤莊

之助馬上に指揮し、助之丞槍を以て之を刺す。馬を墜ち其首を取らず。余衆を率

ゐ直ちに我陣を衝きて過ぎ秀家に及ぶを得。正則の隊將福島丹波、手下の兵を率

ゐ力戦し十余級を獲る。大全・合戦誌・余史 秀家石原嶺に背き東南に向きて陣す。河尻

肥後守・石河光吉・布施屋飛驒守・玉置小平次・糟屋内膳正・赤澤山城守・池田伊豫守・戸田重政・平塚為廣、秀家の右に陣す。大全、河尻肥後守上有有馬修理大夫。按ずるに

有馬晴信、大坂の檄を承るも未だ嘗て出兵せず。事下文十月に見ゆ。故に書かず 大谷吉隆・其子吉久・甥

木下頼継・朽木元綱・小川祐忠・脇坂安治・其子安元・赤座久兵衛等、松尾山麓に陣す。小西行長・島津惟新・其子忠恒・姪豊久・織田秀雄大全無秀雄。今拠合戦誌。信

雄長子。参議従三位称越前大野宰相 織田左衛門佐信高信長公第七子初称藤四郎。大全云、小名小洞 及び

大阪弓銃隊長、其左に陣す。石田三成天満山麓に陣し列柵すること二重。島清興・

其子新吉清長諸書作政勝。大全位勝。今従諸家系図纂 次子十次郎清資・大場土佐・大山伯耆・

舞兵庫・森九兵衛・蒲生備中・北川平左衛門等六十余人柵前に陣す。毛利秀元・

吉川廣家・穴戸備前守・安国寺恵瓊・長束正家・其弟伊賀守・長曾我部盛親・鍋

島勝茂等南宮山・栗原山に陣す。兵総て十二万八千六百余人。合戦誌曰、分為十八隊。按

ずるに敵將の陣列諸書同じからず。今従大全 大谷吉隆兵を分け吉久・頼継をして重井口を扼おさへ

しむ。自ら勝兵（強い兵）六百余人を将み松尾山に向ひ陣を張り、以て豊臣秀秋の変に備ふ。合戦誌・本書曰、分兵四千。使大谷大学・木下山城守将之。抛大全。吉隆兵総二千八百人。故今不挙其

数 三成・吉隆、元綱・祐忠・安治・安元・久兵衛等潜かに帰順を謀るを、知らず。

故に亦之をして秀秋に備へしむ。合戦誌 是日、昏霧四塞、咫尺弁ぜず（見分けられない）

日辰しんを加へ（時がたつ）漸く晴る。神祖関原街東より馬を西上に進むること十二町。

渡辺守綱地形の利害を説き又陣を三町ばかり進む。前鋒酒井家次、旌旗十二旒を建て神祖に先んずること九町ばかり。本多正純・奥平信昌・其子家昌・松平忠明・

戸田一西・其子氏鐵・松平家清・青山忠成・其子伯耆守忠俊後更播磨守・永井直勝・

松平家乗等の陣其次に列す。秀家・三成・吉隆、神祖南宮山を後にして陣を進む

るを見、前後に夾撃せんと欲す。故に部下を戒め与戦するなし。大全 下野守忠吉初

めて戦場に莅のぞむ。井伊直政は其婦翁（妻の父）なる故に神祖、直政をして之を導かし

む。直政、勝兵を率ゐること三百ばかり。前軍に進み至る。関一政、塗みちに直政に

遇ひ何人の部下に属すべきかを問ふ。直政曰はく「第く吾に跟ひ来たれ」と。一政之に従ふ。本多忠勝馳せ至り色を作し直政を責めて曰はく「今日の事、吾と子と共に先鋒を為す。何ぞ独り進むを得る」と。直政曰はく「吾れ命を奉け忠吉卿を導く。子と共に事するを得ず」と。忠勝愈怒る。二人忿争す。事將に不測たらんとす。一政之を和解し遂に平するを得。直政、福島正則の陣に先んぜんと欲して進む。正則の兵可児才蔵、横槍して呵りて曰はく「福島左衛門大夫命を奉じて先鋒を為す。他人此を過ぐるを許さず」と。直政給きて曰はく「吾井伊侍従なり。命を蒙り忠吉卿と出で候騎を為す」と。才蔵曰はく「然らば則ち多兵は不可なり。須らく之を減ずべし」と。直政已むを得ず木股右京をして兵衆を統めしめ纒かに五六騎を率ゐ敵軍に近づく。大全・合戦誌・餘史・慶元記・関原軍記、按ずるに、合戦誌、右京、土佐と作す。蓋し称を更ふるなり。今従大全 両軍銃を発し交戦す。藤堂高虎の甥藤堂新七郎良勝級を第一に獲る。使を遣はし之を麾下に献ず。神祖之を褒む。既にして麾下の海螺（ほ

ら貝）鳴る。東軍大喊して進む。下野守忠吉、島津惟新の陣を冒し手づから其兵松浦三郎兵衛を撃つ。三郎兵衛多力にして健闘す。忠吉創を被るも勇氣撓まず馬上に相搏ちて墮す。従兵加藤孫太郎其首を獲る。忠吉又進み敵を撃つ。従兵纔かに四人幾んど危し。井伊直政手下の兵を率ゐ之を救ふ。木股右京・鈴木重好、衆を励まし督戦す。小幡勘兵衛景憲 武田信玄之土、山城守虎盛孫。又兵衛昌盛子。晩年号道牛。合戦誌・

小幡道牛事歴並云、景憲時蒙世子譴責。故不得列麾下。在木股土佐之隊接戦 槍を揮ひ力闘し級を獲る。

脇五右衛門・岡本半助・向山外記皆戦功有り。 大全・合戦誌・餘史 鈴木重好率先勇猛たりて惟新の陣を撃破す。直政凡そ五十三級を獲る。 鈴木重好傳 松倉重正、直政に属し力戦功有り。本多忠勝、神祖賜ふ所の駿馬に騎し 号三国驪（くろうま）、長四尺八寸余、大

全・餘史為世子所賜。今従家忠日記・松栄紀事 惟新の陣を横から衝く。敵兵披摩（摩）す（ふるえ伏

す）。馬鉛たまに中り斃る。従兵梶金平己の馬を授け乘らしむ。本多忠朝時に年十九、手づから惟新の兵二人を斬る。従兵山内主水・加藤忠左衛門・吉原新介・長野新

四郎・青山三四郎等皆善戦す。桑山左衛門佐一直 修理亮重晴孫九郎二郎一重第二子、為兄修理

亮一晴子養 本多忠勝に属し功効(功勞)有り。石河貞政、石田三成の候騎服部新左衛門

を斬り 大全云、麾下士服部仲之從父弟 其首を上る。神祖之を檢し是の日の第一級と為す。

大全・合戦誌・餘史○大全曰、福島正則之兵渡辺彦助先石川伊豆守獲首。先備正則之覽然後獻之麾下。故後於伊豆守。

按ずるに、是に先んじ藤堂良勝級を第一に獲る。福島丹波も亦宇喜多秀家の後軍を邀撃し十余級を獲る。然れども大

軍未だ接戦せざるの前に在り。故に第一と為すを得ざるなり 前鋒福島正則西に馳せ先づ宇喜多秀家

の陣を撃つ。秀家二万余兵を分け五隊と為す。前軍と東軍と接戦し其鋒甚だ銃(銃)し。

正則の兵退走すること五明(町)ばかり。星野又八眉びせんとう尖刀を揮ひ還り闘ひ敵三人を斬り

て死す。其余の戦死三十人に幾ちかし。衆支ふる能はず。正則大いに怒り厲声呵之(声

を励ましはっぱをかける)。福島丹波・小関石見・長尾隼人等衆を励まし還り闘ふ。互進

互退。勝敗未だ決せず。 大全・合戦誌・餘史 加藤左衛門佐・筒井定次、秀家の陣を横撃

し之を破る。 合戦誌 黒田長政、相川の北に陣し青塚に向ひ島清興の陣を撃つ。銃手

隊長白石莊兵衛・菅六之助・野口左助・益田與助等鳥銃を連発し敵兵辟易す。 大全

○本書拳一説曰、菅六之助部兵所放鉛弾、中島左近而重創。故其陣輒敗 田中吉政・生駒一正・竹中重門・

戸川達安・岡田將監等石田三成の前軍と接戦し東軍少し却く。三成之を見以為らおもえく南宮山の諸將、内府麾下を合撃せば則ち必ず大捷を得んと。乃ち烽を天満山に挙げ兵を引き丸山を下り大喊して吉政の陣に進撃す。吉政退くこと三町ばかり。

加藤嘉明・細川忠興・黒田長政、三成の陣を横から衝く。細川忠隆・其弟興秋・叔父興元皆槍を揮ひ級を獲る。忠興陣を冒し力戦す。前田与十郎 按ずるに、此れ蟹江城

主前田与十郎と称同じくして人異なる・秀久山少左衛門等六人皆級を獲る。伊丹意頓、黒田

長政に属し三成の隊長安宅作右衛門と槍を接す。作右衛門勇健にして意頓をつ鏝き之を仆す。黒田一成馳せ至り作右衛門を撃ち之を斃す。意頓をして其首を取らしむ。進み蒲生將監と相う（搏）ち其級を獲る。意頓、作右衛門の屍を跨ぎ其首を取らんと欲しきす創重く死に面す。其余長政の兵後藤又兵衛基次 詳注于十九年・生田小屋

之助等十三人皆級を獲る。大全・合戦誌・餘史○大全曰、十四日夜長政選精兵十五人戒之曰、明日之戰不

得離我左右。馳逐如我手足。若有離群独戦者、雖得大将之首亦不得為功。吳意以為三成兇徒之魁帥也。欲親擊之以償

宿憾故君臣一心衝突其陣。而三成竟敗走。又兵衛・小屋之助等十二人皆在選中健闘不遺余力。長政大賞其功 田中吉

政・生駒一正勢に乗り還り闘ふ。吉政の兵中村采女、三成の隊長紐忠右衛門を斬

る。一正の兵脇阪源右衛門・黒田久六等力戦し級を獲る。三成の前軍支ふる能は

ず。竟に敗走す。織田有楽・其子長孝・津田高勝等大路の南に陣し進み大谷吉久・

木下頼繼・平塚為廣・戸田重政と相抵あたる。敵兵甚だ勁く我軍又も少し却く。諸將

齊進し前後に合撃す。呼ぶ声天地を動かす。古田重然・猪子内匠・舟越景直・佐

久間安政・其弟勝之獲くびを斬り衆ぬきに挺ぬきんづ。小阪助六・安孫子善十郎・稲熊一左衛

門 諸書稲熊作熊谷。大全作稻垣。今従大田牛一所撰関原記・永井直清本慶長記及餘史・兼松正吉・西尾藤

兵衛・坪内喜太郎利定父子五人皆力戦し級を獲る。日午を加へ(午の刻をすぎ)雌雄未

だ決せず。敵兵動ややもすれば輒ち東軍を挫かんと欲す。久保鳥孫(鳥)兵衛麾下に至り神祖に

言ひて曰はく「戦既にたけなわ酣なるも秀秋兵をかか按へ動かず。処分を請ふ」と。神祖既に南宮山の敵を疑ひ此言を聞きますます益疑ひ無き能はず。色を作して曰はく「豎子のな売る所と為るな（青二才にやられた）を恨む」と。乃ち孫兵衛をして銃手二十人を率ゐ松尾山に向け発銃せしめ之を脅す。秀秋の前鋒隊伍を整へ將に我陣に向はんとす。平岡頼勝・稻葉正成海螺を鳴らし旌旗を進め倒戈（裏切り）の約有るを諸軍に告ぐ。秀秋の歩騎八千、五千を以て左右翼と為し三千を麾下親兵と為す。松尾山を下り大谷吉隆の陣を直撃す。頼勝・正成左右に分かれ進む。銃手六百雷発雨注す。大全・合戦

誌・餘史。三書並曰、秀秋監使村上宇兵衛告反戈之約于前軍隊將松野主馬、主馬大驚曰、臨戦変節謂之盾裏反忠不忠不義。小早川家絶無其事。吾不能聽命。唯一死。可以報国耳。宇兵衛曰、君侯既与關東定約。專為宗社不可中变。

今子独拒命則是亦不忠不義也。主馬服其言。雖引兵下山而終不与敵兵接戦。大全亦曰、主馬領五千石、乱平致仕而去往京師。落髮居黒谷、及賜備前美作於秀秋、招之為執政、固辞不出。其後田中吉政厚幣招之、乃出給一万石。晚年駿河大納言忠長卿召為家老、給二万石。忠長卿封除又為僑人、号道圓终于京師 大谷吉久・木下順継・戸田

重政・平塚為廣、方に東軍と戦ふ。秀秋の来進を見、東軍を舍き之と戦ふ。吉隆  
予め軍必ず利不ざるありを知り亟やかに自裁せんと欲す。故に擐甲せず軽服にて駕輿  
す。其輿の四方皆空く。新兵をして之を昇かかしめ、以て屠滅せしむ。徳川記・合戦誌・

餘史・松栄紀事並曰、吉隆欲馬上自裁、故不擐甲軽服騎馬。大全不然其説。今從大全及毛利家記 兵六百を將る

輿中に指揮す。高く呼ばはり大罵して曰はく「秀秋無状（無礼）。怨み骨髓に徹す。

今之を斬らずは更に何時を待たんや。宜しく直ちに麾下に入り之を取るべし」と。

兵皆殊死戦ふ。重政・為廣槍を揮ひ力戦し秀秋の陣を大破す。頼勝・正成衆を励

まして曰はく「兵書に之有り。小敵之れ堅く大敵之れ禽とりこなり」と。須らく力を併

せ決志し以て大谷父子を獲ふべし」と。然るに敵兵勇銃銃にして秀秋の兵敗走す。

田中勘左衛門・布目新平等二十九人戦死す。劊を被る者五十人に幾ちかし。合戦誌曰、戦

死三百七十余人。今從大全 秀秋大いに怒り新兵を以て之を攻む。重政父子五百余人大呼し

進み闘ふ。為廣父子六十人秀秋の陣を横撃し又之を敗る。合戦誌 監使奥平貞治級を

獲り之を麾下に上る。力戦して死す。神祖之を惜しむ。大全・合戦誌・餘史並曰、神祖務（勞）

其戦死給江州采地三百石於其母 藤堂高虎・織田有楽・其子長孝・津田高勝、吉隆の左に迫

る。脇阪安治、既に高虎に憑き（つき従う）納款す。故に藤川を渡り吉隆の右に迫る。

小川祐忠・柏木元綱・赤座久兵衛、安治と同進す。秀秋の敗兵勢に乗り還り闘ふ。

吉隆三面に敵を受け力猶ほ不屈のごとし。又秀秋の前軍を撃退すること一町ばかり。

東軍左右に競進し敵兵披靡（おそれ伏す）す。吉隆常に善く士卒を撫し死に至るも

一として離叛する者無し。銃兵（銃）三十余人皆戦死す。津田高勝と戸田重政と馬上に

相闘ふ。高勝乗る所の馬刀光に驚きて逸れ去る。織田長孝来、重政と接す。二人雅（も）

より相識る。下馬苦戦す。重政戦を累（かさ）ね力疲る。長孝終に其首を獲る。重政の宰

鶴見金左衛門進み長孝を撃つ。其兵矢田太兵衛、金左衛門を横撃し之を斬る。秀

秋の近臣横田小半助、平塚為廣と闘ふ。為廣十字槍を以て之を刺殺す。其首を齎

し吉隆の陣に送りて曰はく「我兵既に敗る。復び振ふべからず。一死以て知己に酬（むく）

いん。子当に引求すべし」と。吉隆、為廣の使に対し大いに其勇敢を称賞す。為廣連戦し創を被る。田のあぜ（畦）に踞りて憩ふ。小川祐忠の兵糧井太兵衛進み之と闘ふ。為廣を縦きて之を仆す。為廣十字槍を投げ太兵衛に謂ひて曰はく「汝の宝器と為せ」と。遂に首を授く。為廣の子莊兵衛・重政の子内記、皆苦戦し死す。吉隆の隊長湯浅五助首を提げ来、戦敗るるを告ぐ。吉隆、五助に謂ひて曰はく「是れ吾自尽の秋なり。猶予し時を移さば則ち恐らくは辱を受けん。吾れ悪疾に罹り顔面甚だ醜し。宜しく吾首を蔵し敵人をして之を見しむる勿かるべし」と。遂に自屠す。五助介錯す。時に年四十二。三浦喜太夫帛を以て其首を囊れ深き泥中に瘞うずむ。而して自殺す。五助又馳せ陣を犯す。藤堂高虎の姪仁右衛門高則之を斬る。高

則諸書作高刑。藤堂系図亦作高刑曰仁右衛門高則子。抛之、則高則父名也。然系図云、高刑戦死関原。則繆誤不足信。

今抛高虎行状、訂之 高虎之を麾下に上る。神祖之を聞きて曰はく「五助驍勇にして缺（欠）脣なり。須らく之を駢みるべし」と。近臣其首を検するに果たして缺脣なり。乃

ち五助の首と定め為す。 大全・合戦誌・餘史

臣按ずるに、北齊の祖斑盲を病む。北徐州の乱に自ら馬に乗り陣に臨み左右に射す。反する者其の盲を聞き其れ必ず出づる能はずと謂ふ<sup>おも</sup>。忽ち之を見大いに驚き散り走る。斑且は戦ひ且は守る。竟に其の乱を平らぐ、斑、膽略有りと雖へども讒慝<sup>ざんてい</sup>(よこしまな人)の鄙夫なり。大谷吉隆亦病盲なれども其の志操、斑の上に廻出す。奇略衆を超え勇決群を挺<sup>ぬき</sup>んづ。始め神祖に依り功名を立つ。而るに終に石田三成に党し之の謀主を為すは其志に非ざるなり。吉隆固より三成の成す無きを知り之を諫むること再三。而れども三成の反謀已に決し竟に回<sup>かえ</sup>す能はず。吉隆匹夫の諒(了承)を守り死を以て之を許す。其北国を経略し士卒を訓練するに臂指<sup>ひじ</sup>を使ふが如し。府城を攻めずして直ちに北莊を救ふ。咫尺<sup>しせき</sup>の書を馳せ以て金沢の大軍を却く。其兵機に曉暢<sup>せうちやう</sup>(物事に通じている)たるや皆及ばざる所なり。東西廩戦<sup>おう</sup>(大戦)の日に暨<sup>およ</sup>ぶや予め金吾中納言の異図有るを知り、六百の精銳を選

び八千の勁兵に抗す。士卒皆其恵を懐ひ敢へて離叛する者無し。其戦敗るるに及び決然と自屠しりくじよく（はずかしめ）を受けず。豈に知勇出群の者に非ずや

大谷吉久・木下頼継、残兵纔かに七八騎、相對し涕泣し陣に赴きて死せんと欲す。

合戦誌曰、大谷・山城守戦于垂井口。朝霧遮山不知吉隆苦戦。故不来救。既而聞吉隆自殺引兵還。京極修理亮縦撃敗

之。従兵或死或走。留者纔四十四騎。二人將自殺。其臣諫之故亡去。今從大全吉久の乳母子橋本久八郎めのとこ

諫めて曰はく「此陣破ると雖へども大阪・佐和山城主（守）堅固なり。東軍輒ち攻むるを得ず。敦賀に還り残兵を招聚し以て再挙を図るに如かず」と。二人之に従ふ。

大全・合戦誌・餘史 豊臣秀秋帰順するに及び、神祖、麾下の兵に命じ大喊して進ましむ。

衆軍皆喊し勢に乗り奮撃す。右屠左と剪縦横せんに馳突す。西軍大敗す。家忠日記・大全・合

戦誌・餘史・関原軍記・慶元記 宇喜多秀家、秀秋の倒戈に怒り其陣を撃ち交刃して死せん

と欲す。明石掃部助守重注于十九年 諫めて曰はく「君侯、諸將に号令す。而るに匹

夫の行を為すは不可なり」と。秀家曰はく「吾唯だ秀秋の反覆を悪み之と共に死

せんと欲するのみに非ず。特だ怪夫輝元約を變し師を出さず、秀元も亦約に倍きそむ觀望す。天下の事知るべきなり。一死以て太閤の恩に報いん。吾志決せり」と。

守重固く諫めて曰はく「縦たとひ大老奉行関東に帰降すとも君侯宜しく籌策ちゆうさく（計略）を運らすべし。危難を極むる（終わらず）に秀頼公を擁戴するを以てせよ」と。言甚だ切至たり。秀家已むを得ず之に従ふ。近臣二人と膽吹山いぶきに走にげ入る。守重戦敗れ京師にげに奔る。大全・合戦誌・餘史並曰、秀家与近臣進藤三左衛門・黒田勘十郎脱甲舍馬歴膽吹山間道至美濃粕川谷。

日暮雨漂倚岩壁避雨。天既明。至中山郷土人争起褌（うばう）敗兵衣服。白樫村村民天野五郎右衛門以槍擬秀家。秀

家乞憐、五郎右衛門知其為貴人投槍而踞。使奴負秀家至己家。匿屋後岩窟。中人莫知之者 大野治長、福島正

則に属す。力戦し秀家の兵甲知七郎右衛門を斬る。大全 細川忠興・黒田長政・加藤嘉明・田中吉政・生駒一正・竹中重門、石田三成と戦ひ両軍格闘す。織田有楽父子・藤堂高虎、大谷吉隆を破りて来、諸將と合す。敵兵決死血戦し散じて復び合ふこと凡そ七八次。我兵、蒲生大膳・北川十郎以下 大膳備中子、十郎平左衛門子 一百三

十人を斬る。藤堂良政進み島清興の長子清長と相搏ちて死す。清長其首を取り將に起たたとするに良政の近臣山本平三郎、清長を刺殺し其級を獲る。蒲生備中・北川平左衛門、胡床に坐し敗兵を集む。備中刀を揮ひ力戦す。馬斃れ身疲れて憩ひ見るに、織田有楽馬を馳せて過ぐ。之に謂ひて曰はく、「吾嘗て蒲生飛驒守に事つかへ横山喜内と称す。君頗る（すこし）識るや不いなや」と。有楽曰はく、「横山喜内は我識る所なり。幸ひ我家に従へ。内府に告げ汝を活かす」と。備中笑ひて曰はく、「君信長公の弟に非ずや。何ぞ其れ人を知らざるの甚だしきや。胡なんす為れぞ君に憑き生を乞はんや」と。拔刀し有楽を斫る。有楽躲避たひし（避けて）馬を墮つ。有楽の兵澤井久蔵槍を備中に擬ぎす（向ける）。備中之を斬る。其の僕来救す。又之を斬る。従兵槍を攢あつめ之を刺殺す。有楽終に其級を獲る。平左衛門遁れ去る。大全・合戦誌・餘史 諸將三成の陣を合撃す。三成戦ひ敗れ膽吹山に逃げ入る。島清興戦死す。餘史曰、左近死生未詳。

或云、戦死。然無獲其首者。合戦誌曰、本多六兵衛獲左近首。不知誰部兵。大全曰、或云、加藤嘉明近習森岡半三郎

擊殺之。其說不足信也。蓋左近中菅六之助部兵所放鉛彈而死。此說近是。今按ずるに、諸家系図纂、興福寺持寶院主の語を載せて曰はく、石田三成の士八条勘兵衛、常に關原の戦を談じて曰はく、軍敗れ勘兵衛左近に勧め共に佐和山城に往き守らんと欲す。左近問ひて曰はく、我子掃部・修理如何（いかん）、と。勘兵衛曰はく、二人戦死す。と。左近曰はく、然れば則ち何の期待する所にて生を媮（ぬす）まんやと。則ち陣に馳せ赴く。勘兵衛鎧褱（よろいの袖）を牽き之を止む。左近槍を揮ひ之を擬（ねら）ひ遂に馳せ去る。諸書此の事を知らず皆云、之を知る所莫しと。其実は戦死なり。此說に拠れば則ち又銃に中る後に在り。附以備考。持寶院、清興の父豊前守建つる所。清興父子の牌今焉に見存（現存）す。掃部・修理、即新吉・十次郎也。諸將勝に乗り北ぐるを逐ひ八千余級を獲る。

合戦誌・松栄紀事 加藤嘉明追撃の功を貪らず隊伍を嚴め以て変に備ふ。嘉明且に赤阪を出でんとし、鎧甲鮮麗たり。接戦に及び平常の鎧甲を以て之を人と易ふ。皆其の戎事に老けたるを称む。島津惟新前軍既に敗る。麾下二千余人を以て一隊と爲し殿して退く。其鋒甚だ鋭く向かふ所披靡す。福島正之寡兵を以て之を邀撃せんと欲す。惟新之を撃破す。本軍の前鋒酒井家次の陣も亦頗る動揺す。既にして

諸將戦ひ勝つ。大軍競進し、惟新の陣を合撃し之を破る。島津豊久、惟新と馬を立て耳語すること良久<sup>や</sup>し。遂に陣を犯して死す。餘史、豊久作義家曰、義久第二子惟新之弟。按

ずるに、島津家譜、豊久、義久の弟、中務大輔家久の子、義弘の姪。而るに義家と名のる者無し。餘史誤れり。今從

大全・合戦誌・松栄紀事 惟新、免るべからざるを知り馬を跋<sup>かりた</sup>て（勢いよく行く）將に戦死せ

んとす。其宰阿多盛淳入道長壽 松栄紀事盛淳作忠実。今從大全・合戦誌・餘史 鎧褻<sup>ひ</sup>を牽き諫め

て曰はく「大將は死を輕んずべからず。臣、命に代るを請ふ」と。乃ち島津兵庫

頭義弘入道惟新と称し力戦して死す。惟新、間を得膽吹山に向かひて去る。下野

守忠吉、井伊直政と急ぎ之を追撃す。惟新の兵還り闘ひ父子の急を救ふ。直政磨

を東し衆を励ます。敵兵柏田源蔵銃を發し直政の腕に中る。直政馬を墜つ。從兵

之を扶けて去る。惟新多羅尾山に遁げ入る。家忠日記・大全・関原軍記・合戦誌・餘史・松栄紀事

臣按ずるに、村上義光、護良親王に代りて死す。殆んど紀信（漢初の部將）の節（節

義）有り。大日本史特だ義烈伝ふと書き以て人臣の勸と為す。柳瀬の敗に毛受勝

助、柴田修理亮を称し、武蔵野の軍に、篠岡平右衛門、瀧川伊豫守を称し、青野原の戦に、阿多長壽、島津兵庫頭を称す。皆主君の死に代り以て急難を救ふ。忠烈義光につ並びぐ。名節前古には媿はぢず。後の史筆をと乗る者、其れ亦信を考する所有るか

辰より未に至り勝敗方に決す。凡そ敵兵二万八千余級を斬る。合戦誌曰、三万二千六百級。

餘史曰、二万五千七十餘級。今從大全我軍の死者三千七百人。其余兩軍創を被る者あ勝かけて算かふ

べからず。大全奥平貞治・藤堂良政・伊丹意頓・河村助右衛門・村越兵庫戦死す。

神祖之を惜しむ。而して将帥一人の死者も無きを喜ぶ。合戦誌・松榮紀事毛利秀元、

南宮山に屯す。長束正家、三成烽を挙ぐるを見、使を秀元の營に馳せ之をつ趣なす。

秀元、惠瓊の言によ偏より（近づく）歸款の約をか渝かへ以て兵を進めんと欲す。吉川廣家前軍に在り、旗を動ぜず。秀元、廣家を越え進軍する能はず。池田輝政・浅野幸長等諸将山下に列陣し兵を励まし以て待つ。秀元の兵進退そん拋たを失ふ。故に伝そん餼た（夕食）

に託し以て遲留す。時の人を宰相殿空にして厨に行くと言ふ。頃之<sup>しほらく</sup>して秀元使を正家・惠瓊の陣に遣はして曰はく、「吾下山し進軍せんと欲す。而るに前鋒吉川廣家・穴戸備前守、進兵を肯<sup>がえん</sup>ぜず。吾未だ之を如何<sup>いかん</sup>ともせざるなり」と。正家・惠瓊<sup>もと</sup>素秀元に隸す。故に之に敵する能はず。長曾我部盛親も亦栗原山に陣す。交兵するを得ず。猶予し時を移す。既にして関原戦敗る。故に正家・惠瓊・盛親、戦はずして走る。大全 小西行長一戦し輒ち敗る。大全曰、一記(説力)行長陣于島津惟新之右及

接戦。惟新馳使督戦。行長不聴終不交一矢而敗走。有知行長之事者。宮越秀興面質之、行長前鋒接槍。事証甚明。然

大軍崩潰故不得已敗走。今從之 正家伊勢に奔り、盛親伊賀を歴界津に奔る。行長・惠瓊、

膽吹山に走り入る。合戦誌・餘史・松栄紀事。各有異同。今從大全○松栄紀事拳一説曰、吉川廣家・福原越

後就黒田長政・井伊直政・本多忠勝請曰、得賜長門・周防二国以存毛利家則帰須(順)尽忠。然輝元・秀元実不知其

謀。按ずるに、此毛利家記の説にして秀元の為に隱諱する者なり。大全曰、秀元不欲顯言其事故始終諉言廣家、而外

為不知其謀。此説得之矣。今從紀事正文。又合戦誌曰、秀元・廣家実帰須(順)関東。則撃正家以下兇徒以著功効可

也。今擁大兵從為觀望。其事甚醜。此論雖似是而廣家心事終不如也。神祖高きに拠りて陣す。胡床に坐し首級を検す。近侍を召して曰はく「冑を持ち来たれ」と。皆今日大捷す、今何ぞ冑を求め為すやと謂ふおも。神祖之を戴き左右を顧みて曰はく「諺に云ふ、勝ちて冑の緒を結めよと。此の謂なり」としい。大全・合戦誌・餘史 諸將皆上謁す。黒田長政先づ至る。神祖其の手を執りて曰はく「今日の捷全て卿の謀略に在り。摧堅挫銳（難敵を打倒する）、渠魁（きよかい）（首領）三成を破走す。其の功や、無此（比）」と。手づから佩ぶる所の吉光の短刀を賜ふ。大全 諸將皆戦勝を賀し、神祖之を勞（ねぎら）ふ。本多忠勝介を為し進みて曰はく「今且（まな）に諸將の戦功皆比倫を絶つ（比べるものもない）」と。福島正則則曰はく「忠勝諸軍を指揮する、曲尽（委曲を尽くす）の其妙は、素聞（もと）くに過ぐ」と。忠勝曰はく「敵甚だ脆弱たり。計較に足らず（比較するまでもない）。人多く、其功を伐らざるなり」と。大全・合戦誌・餘史 織田有楽、蒲生備中の首を掲げて至る。神祖曰はく「老人壮事を作す。將に不可なる無し。諸書以此為有楽之書。今從大全 備中は吾の識る所なり。」

善く其首を瘞うすめよ」と。本多忠朝、敵二騎を斬り刀反り室に入らざること数寸、神祖の前に跪ひざまずく。神祖其功を褒む。下野守忠吉、劊を囊つつみて至る。神祖問ひて曰はく「汝劊を被るか」と。対へて曰はく「甚だ軽し」と。井伊直政、劊を病み手を箭室に挂かけて前に来。神祖起ちて曰はく「兵部も亦劊を被るか。軽重は何如いかん」と。親みずから薬を取り之に傳ふす。亦忠吉にも賜ふ。大全・合戦誌・餘史 麾下の士、級を上たてまつる者絡繹相踵らくえきそうしゅう（相次ぐ）す。米津梅干之助・小栗忠政の戦功尤も著し。家忠日記 結城参河守秀康の使眞沙作兵衛・山名與次兵衛も亦級を獲り晋すすみ謁す。神祖、之を褒め亟やかに東歸し捷を秀康に報ぜしむ。二人劊を被り行く能はず。故に他人に命ず。

大全・合戦誌・餘史・慶元記 正則又曰はく「閣下の威風廣大故に日を経ずして彊敵崩潰す。

古より未だ成功此の如く其の速やかなるを聞かざるなり」と。家忠日記・松栄紀事 岡江雪、神祖に言ひて曰はく「恰も昏き夜の明に向かふが如し。宜しく凱歌を唱ふべし」と。諸書皆云、山岡道阿弥発是言。按ずるに、此時道阿弥、福島正頼を援け長島城に在り、而れば戦場に在

ざるなり。家忠日記、正則の書と為す。今大全に従ふ神祖曰はく「兇賊を殄滅するは吾が掌握に在り、但だ諸將の妻孥皆大阪に在り。吾れ日夜之を憂ふ。数日を過ぎず必ず妻孥を諸將に付し、然る後に凱歌を唱ふべきなり」と。諸將皆感泣す。創業記・徳川記・細川家

傳録・慶元記・松栄紀事、諸書皆云、三日之間必付妻孥於諸將。按ずるに、神祖、英算神の如しと雖へども必ずしも

日辰を指定せず。家忠日記不日、大全云、近日。今從之神祖、村越直吉を松尾山に遣はし豊臣秀秋を招く。秀秋、近臣十余人を率ゐ来謁す。脇阪安治父子・朽木元綱、相踵して至る。神祖胡床を下り秀秋を勞はりて曰はく「今日の事、功莫大なり。今より憾みを釈し修好せん。宜しく明日佐和山城を攻むべし」と。松栄紀事曰、神祖勞秀秋之功曰、卿

年尚少。他日勿懷携貳。秀秋惶恐諸攻佐和山城。按ずるに、神祖敵將を緩撫し其の反側の心を安んず。此言有るべか

らず。今従家忠日記・大全 秀秋前鋒を為すを請ふ。神祖曰はく「前鋒既に井伊兵部卿に命ず。宜しく脇阪・朽木等を率ゐ後軍を為すべし」と。秀秋唯だ退く。合戦誌曰、神祖命

前鋒於直政、秀秋為後軍。秀秋固請為前鋒放易之。以直政為後軍。今従家忠日記・徳川記・餘史・松栄紀事 小川祐

忠、一柳直盛の姑夫おばなり。故に直盛に就き其罪を赦すを乞ふ。神祖許さずして曰はく、「小川父子、三成と最も親し。罪死に当る。然れども直盛の戦功を以て死を貸す（一時ゆるす）」と。仍て直盛をして之を拘とらへしむ。家忠日記・徳川記・合戦誌・餘史・松栄

紀事並云、小川土佐守与脇阪父子・朽木河内守同謁見。十六日与諸將攻佐和山城。抛大全、神祖責其罪不許謁見。安得在攻城之列乎。諸書誤矣。赤座久兵衛亦与三將帰降。然以罪重見放。在下文創業記・家忠日記。六年末書曰、関原

之戦小川祐忠雖帰正至今不賜采邑。時人皆謂祐忠棄弱附疆見利忌義故不録其功。慶長一統記曰、相伝祐恵多反覆至関原凡七次。人皆惡之。附以備考 晩に及び神祖陣を大谷吉隆の藤川の壘に移す。諸將皆其側

近に営す。井伊直政・本多忠勝、陣を今津に進む。徳川記作伊益、蓋以国音相近訛。今抛大全

訂之 時に天大雨す。諸營た爨炊く能はず。神祖監使をして馳せしめ諸軍に告げて曰はく、「米を淘とぎ其の浸潤を候まち然る後に之を食へ。生食すべからず」と。軍を挙げ皆神祖の用心周摯したるに感ず。大全・合戦誌・餘史

臣按ずるに、宮腰秀興（宮川忍齋）曰はく、一書関原の戦を記して曰はく、大垣・

赤阪兩軍相持すること二旬、而して終に交戦せざるは、東軍神祖の至るを待ち、西軍輝元の来るを待てばなり。而して吉川廣家關東に通款し輝元をして出師せざらしむ。秀家・三成、其謀を知らず。徒らに曠時日（時をむだにする）。九月中旬に至り三成、輝元の出でざるを覚り秀家に勧め關原に戦ふと。余（宮腰）謂ふに然らず。三成縦ひ輝元の出でざるを料るとも大津・田辺二城を攻む。其兵五六万を下らず。宜しく其至るを待つべし。而るに妄りに秀家に勧め出戦す。秀家も亦前議を堅守する能はずして其の説を輕信す。此れ其の敗を取る所以なり。一書又曰はく、關原の敗全て秀秋・秀元の懷貳歸款に在りと。是れ則ち然り。然れば神祖の謀略天下に其右に出づる者無し。其至るを待ちて急ぎ戦はんと欲すは皆失策なり。又曰はく、三成書を田中吉政に貽り内応を為さしむ。吉政其書を上る。神祖曰はく「此機に乗り以て敵を給くべし。佯り諾すべし」と。吉政敢へて命を奉けず。神祖曰はく「既に其書を上る。何ぞ之を嫌ふ有らん」と。吉

政輒ち神祖の前に在り、書を作し之を報かえす。既にして敵將軍事を議る。島津義弘三成に言ひて曰はく、「内府岡山に屯す。吾今夜密かに親兵を遣はし陣營に放火す。其擾乱に乗じ之を縦撃せば勝たざる蔑(無)し」と。三成之を拒みて曰はく、「此れ危道なり、田中兵部大輔内応の約有り。明日の戦に勝を取るは必なり」と。義弘之を争ひ、得ずと(ここまで一書の引用)。余又然らずと謂おもふ。関東の諸將赤阪に屯し既に浹しゅう辰しん(十二日間)を踰こゆ。嘗て聞くに秀家・三成多く計画を方あたると。此時に吉政を誘致せずして必ず神祖の至るを待たんと欲するや。且吉政は大藩強宗に非ず。縦ひ内応を為すとも事に益無し。三成、恃み以て援と為すべからず。而して義弘の謀略を拒むなりと。(ここまで宮腰の言)臣謂おもふに庚子の乱記する者一ならず。或は伝聞の繆ま有り。或は臆度の説有り。是非混淆し、真偽雜糅じゅうす。秀興撰する所、異同を参覈かくし。駁を折衷す。其言鑿さく々さく(明らかで確実なさま)と拠るべし。故に此に著す

岐阜中納言秀信、上加納に幽せらる。神祖其の信長の嫡孫たるを以て之を殺すに忍びず高野山に放つ。松栄紀事。本書不書秀信幽于何所。按ずるに、岐阜城陥ち秀信出降す。輝政之を上加納に幽す。上文に見ゆ。今此書に拠る○諸書並云、秀信入高野山後卒。而不書在何年。按ずるに、公卿補任八年に至り秀信を書きて九年以後書かず。蓋し九年に卒するなり織田秀雄の罪を積して之を放つ。合戦誌。拠

織田家譜、秀雄十五年八月病卒

是日、味爽まいそう（未明）津輕為信・水野勝成・西尾光教・松平康長等相議り曾根壘を出で島津惟新の楽田砦を攻む。敵関原に出で壘壁皆空く。諸將直進し大垣城を囲む。敵街巷に出で之を拒ぐ。光教進み東方より正門に向かふ。敵郭門を闔ぢ出でず。

水野勝成・其弟市正郭門を破る。光教・勝成の兵第三城に進攻す。城兵悉力拒闘し勝成槍を揮ひ敵を殺す。従士及び光教の兵苦戦し級を獲る。大全・関原記・水野勝成事

紀為信・康長も亦正門に向かふ。門闔とぢ入るを得ず。康長銃手隊長に謂ひて曰はく、「銃たるは特だ敵を殪すのみに非ず亦城を破るの利器なり。宜しく此を以て雉堞ちちよう

(城壁上の低い垣)を摧破すべし」と。士卒争ひ鳥銃を以て撃辟げきへき(押しつけ)睥睨へいげい(城壁のくほみからのぞき見る)し遂に第三城に入るを得。敵第二城に抛り堅く之を拒ぐ。勝成・為信・光教の兵戮力りくじよく(力をあわす)攻撃し遂に第三城を破る。火を縦ち街市を焚き捷を関原に報ず。神祖其功を褒む。四将相議るに、関原戦勝せば則ち城無日に陥ちん。今之を急攻せば則ち士卒を多く損ず。乃ち兵を引き退き之を緩攻せんと。拠勝成事記、

勝成収兵林村仏寺

其夜、敵将相良長毎・秋月種長・高橋元種、書を勝成・康長に遣はして曰はく「寛を蒙るを得ば、則ち当に計を設け、福原以下将帥を誘殺し以て帰順の誠を顕すべし」と。勝成・康長、之を本営に報ず。神祖之を許す。二人密かに城中に報し之を図らしむ。相良長毎請ひて曰はく「計成らば則ち開門し麾を揮ひ以て敵将の首を示さん。二将須らく旗一二旒を城中に進め建て以て戦鬪を止むべし」と。勝成・

康長遂に其約を定む。家忠日記・大全・合戦誌・餘史・松栄紀事

列（烈）祖成績卷之九終